

千 河 原 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

1984

山 形 県
山 形 県 教 育 委 員 会

ち が わら
千 河 原 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

昭 和 59 年 3 月

山 形 県
山 形 県 教 育 委 員 会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和58年度に実施した千河原遺跡発掘調査の成果をまとめたものであります。

調査の結果、庄内地方では従来発掘例の少なかった竪穴住居跡が一群になって発見されたり、生活用具の一つである夔形土器が多量に出土するなど、当時の生活様式の解明に大きな手がかりを得ることができました。また庄内地方の平野部で竪穴住居跡が発見されたことにより、当地方の平安時代における住生活のあり方を考える上でも重要な示唆を与えてくれました。

人間が地上に生活している以上、土地とは切り離せない歴史があります。土地に埋蔵された文化財は比較的その痕跡をとどめ、千年以上を経た今日、われわれに当時の歴史を如実に思い起させてくれます。

近年、埋蔵文化財と農林事業との係わりは増加の傾向にありますが、文化財を国民共有の財産として積極的にその事実を記録し、現時点で知り得た祖先の歴史を継承して子孫へ伝達していくことが、われわれ現代人の責務と申せましょう。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねて、皆さまの御理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御協力をいただいた関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和59年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

1. 本書は山形県教育委員会が昭和58年度に山形県農林部の委託を受け、山形県埋蔵文化財緊急調査団が実施した県営ほ場整備事業（最上川地区）に係わる余目町千河原遺跡（県遺跡番号 1701番）の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、山形県庄内支庁経済部最上川土地改良事務所、余目町教育委員会並びに最上川土地改良区などの関係諸機関の協力を得て実施した。調査期間は、昭和58年6月22日から7月1日までと、同年8月22日から9月13日までの2次にわたり延べ24日間である。
3. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐藤庄一（庄内教育事務所埋蔵文化財調査係長）

現場主任 野尻 侃（庄内教育事務所技師）

調査員 安部 実（庄内教育事務所技師）

庄内事務所長 池田泰正（庄内教育事務所長）

所長補佐（総括担当）藤塚真一（庄内教育事務所次長）（昭和58年4月～同10月）

山田 登（庄内教育事務所次長）（同年11月～昭和59年3月）

所長補佐（庶務担当）金内光彦（庄内教育事務所総務課長）

所長補佐（業務担当）成田恒夫（庄内教育事務所社会教育課長）

事務局員 藤原正俊（庄内教育事務所総務主査）

4. 掘図縮尺は、各遺構について $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{500}$ 、遺物については $\frac{1}{50}$ を基本とした。遺物図版の縮尺は $\frac{1}{50}$ を基本としたが、異なるものについては縮尺率を示した。方位は磁北を指す。真北はMN-8°09'-Eである。掘図中の記号は、ST-住居跡、SB-建物跡、EB-建物を構成する柱穴、SK-土壤、SD-溝状遺構、SX-性格不明遺構を表す。遺物は一連番号とし、掘図・表・図版中の番号は同一個体である。出土遺物観察表中、計測値で（ ）内の数値は図上復元による。実測図中、断面を黒塗りしてあるものは須恵器、白ヌキは土師器と赤焼土器を示す。
5. 本書の作成は、佐藤庄一、野尻 侃が担当・執筆した。写真撮影は安部 実、編集は野尻 侃、全体については佐藤庄一が統括した。掘図・図版作成にあたっては庄司 功、吉村加代子、小池敏美、佐藤玲子、坪池悦子、菅原郁子がこれを補助した。

目 次

I. 立地と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
II. 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	4
2. 調査の方法と経過	6
3. 遺跡の層序	7
III. 検出遺構	
1. 遺構の分布	8
2. 竪穴住居跡	10
3. 掘立柱建物跡	18
4. SH 1 墓壙	22
5. 土 壤	23
6. 溝状遺構	26
IV. 出土遺物	
1. 竪穴住居跡出土の遺物	28
2. 掘立柱建物跡出土の遺物	29
3. SH 1 墓壙出土の遺物	31
4. 土壤出土の遺物	35
5. SK 61 土壙出土の土器	37
6. 溝状遺構出土の土器	44
7. 包含層出土の遺物	46
V. まとめ	
1. 遺構の時期と変遷	49
2. 庄内地方の竪穴住居跡について	50

付 表 目 次

表 1 住居跡・建物跡出土土器観察表	31	表 5 SK 61 土壙・溝状遺構出土土器観察表	44
表 2 SH 1 墓壙出土遺物観察表	33	表 6 包含層出土土器観察表	46
表 3 土壙出土土器観察表	35	表 7 庄内地方竪穴住居跡検出例一覧	52
表 4 SK 61 土壙出土土器観察表	38		

挿図目次

第1図	千河原遺跡と周辺遺跡	2
第2図	グリッド配置図	5
第3図	土層図	7
第4図	北区遺構配置図	9
第5図	ST 2住居跡	10
第6図	ST 3住居跡	11
第7図	ST 4住居跡	12
第8図	ST 6・12住居跡	13
第9図	SX 7遺構・ST11住居跡	14
第10図	ST 8住居跡	15
第11図	ST 9住居跡	16
第12図	ST10住居跡	17
第13図	南区遺構配置図	19
第14図	SB13・14・15建物跡	21
第15図	SH 1墓壙	23
第16図	土壤	24
第17図	SK61土壤	25
第18図	溝状遺構	27
第19図	住居跡・建物跡出土土器	30
第20図	SH 1墓壙出土遺物	32
第21図	SH 1墓壙出土五輪塔	34
第22図	土壤出土土器	36
第23図	SK61土壤出土土器（1）	39
第24図	SK61土壤出土土器（2）	40
第25図	SK61土壤出土土器（3）	41
第26図	SK61土壤出土土器（4）	42
第27図	SK61土壤出土土器（5）	43
第28図	SK61土壤出土土器（6）・溝状遺構出土土器	45
第29図	包含層出土土器（1）	47
第30図	包含層出土土器（2）	48

図版目次

- 図版 1 遺跡近景 北区全景
- 図版 2 北区遺構検出状況 南区遺構検出状況
- 図版 3 ST 2 住居跡検出状況 ST 3 住居跡検出状況 ST 4 住居跡検出状況
- 図版 4 ST 6 住居跡検出状況 SX7 遺構・ST11 住居跡検出状況 ST8 住居跡検出状況
- 図版 5 ST 9 住居跡検出状況 ST10 住居跡検出状況 ST11 住居跡検出状況
- 図版 6 ST 2 住居跡完掘 ST 3 住居跡完掘 ST 6 住居跡完掘
- 図版 7 ST 6・ST12 住居跡完掘 SX7 遺構・ST11 住居跡完掘 ST8 住居跡完掘
- 図版 8 ST 9 住居跡完掘 ST 8 住居跡 EL40 炉跡 ST10 住居跡 EL55 炉跡
- 図版 9 SB13・14・15 建物跡 EP77 柱穴土器出土状態
- 図版 10 SH1 墓壙検出状況 SH1 墓壙層序 SH1 墓壙下位平面
- 図版 11 SH1 墓壙五輪塔出土状態 SH1 墓壙完掘 SH1 墓壙調査風景
- 図版 12 SK29 土壙検出状況 SK29 土壙層序 SK29 土壙完掘
- 図版 13 SK31 土壙層序 SK31 土壙土器出土状況 SK31 土壙完掘
- 図版 14 SK61 土壙層序 SK61 土壙出土状況 SK61 土壙完掘
- 図版 15 SD33 溝状遺構層序 SD91・92・93 溝状遺構完掘 北区調査風景
- 図版 16 住居跡出土土器（1）
- 図版 17 住居跡出土土器（2）
- 図版 18 SH1 墓壙出土遺物
- 図版 19 SH1 墓壙出土五輪塔
- 図版 20 土壙出土土器
- 図版 21 SK61 土壙出土土器（1）
- 図版 22 SK61 土壙出土土器（2）
- 図版 23 SK61 土壙出土土器（3）
- 図版 24 SK61 土壙出土土器（4）
- 図版 25 SK61 土壙出土土器（5）
- 図版 26 SK61 土壙出土土器（6） 溝状遺構出土土器
- 図版 27 包含層出土土器（1）
- 図版 28 包含層出土土器（2）

I. 立地と環境

1. 地理的環境（第1図）

遠く吾妻山系に源を発する最上川は、山形県内陸部を南から北へ屈曲しながら貫流し、新庄市本合海で西に向きを変え、出羽丘陵の最上峠を西下し庄内平野へ注ぎ込む。

最上峡谷を流れ出た最上川は、東方に位置する出羽丘陵に沿いながら北流し、松嶺付近で大きく西方に蛇行しながら緩やかに曲流し、酒田に至り日本海へ注ぐ。

庄内平野の南半部の地形概観は、大別して東側の出羽丘陵地域と西側の庄内南部平野地域に区分される。平野部での扇状地の発達は良くなく、三角洲性の低地が開け、河間低地あるいは三角洲がこの平野の主部を占める。最上川はこの三角洲性低地を回析し、より低い氾濫原地帯を形成している。最上川南部の平野部地域はさらに最上川氾濫原、庄内南部河間低地、酒田南部三角洲、庄内南部砂丘の4つに細分される。

最上川氾濫原は、最上川に沿う低地であり、三角洲等を側方侵蝕して最上川が形成したものであり、旧流路はいたるところにその痕跡を留め、かつ低湿地性の土地として性格づけられる地域である。

庄内南部河間低地は庄内北部河間低地との間を、最上川氾濫原で分断されたものであり、自然堤防や後背湿地・狹義の河間低地の三者を含んでいる。このうち自然堤防は、最上川流域の砂越・中島・平岡・丸沼・提興野付近にみられる。河間低地上にのる余目町の中心部は、その周縁を最上川の側触によって削られている。

酒田南部三角洲は最上川左岸にあって、海拔高度5~6m以下であり、自然堤防上の微高地がほとんどみられない。また北側では、最上川氾濫原との境界が明瞭でない。

庄内南部砂丘は、最上川以南の河南砂丘で、東から西へ、内帶砂丘列、中間砂丘列、砂丘列間低地の3列が海岸線に平行して存在する（註1）。

千河原遺跡は前述の最上川氾濫原にあり、地籍は東田川郡余目町大字千河原字野中227番地他に所在する。余目町より北北東方2.5km、千河原部落西側の水田中にあり、標高は9m前後を測る。本遺跡は蛇行しながら西流する最上川の南方500mの地点に存在する。付近には自然堤防や旧流路の痕跡を残す地域もあり、湿地性の高い地区である。

表層の地質は最上川の河川沿いに発達した礫および砂の堆積物で、中粗粒の褐色を呈した土壤である。遺跡をおおう表層の地質は粗砂・シルトおよび粘土からなる河岸段丘上の堆積層で、最上部の表土は明褐色から暗褐色の腐殖質がおおっている。

註1 山形県「土地分類基本調査 酒田 5万分の1」1978年



第1図 千河原遺跡と周辺遺跡

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 1. 千河原遺跡 | 2. 樽律院跡 | 3. 五輪塚遺跡 | 4. 廿六木遺跡 |
| 5. 上台遺跡 | 6. 脚殿町遺跡 | 7. 梵天塚墳墓 | 8. 旧余目城跡 |
| 9. 余目城跡 | 10. 紗越城跡 | 11. 松山城跡 | |

2. 歴史的環境（第1回）

余目町を含む庄内平野の南半、所謂「田川地方」をほぼ南北に北流する京田川と赤川、およびその支流である藤島川と大山川が形成する自然堤防や河間低地には、平安時代から安土・桃山時代にかけての集落跡や城館跡が数多く分布する。

この地域は、赤川および京田川（藤島川）の旧氾濫原にあたり、古代より現代に至るまでこの肥沃な土地を求めて開発が重ねられ、有数の穀倉地帯となっている。現在は見渡す限りの水田の中に特有の集散集落がみられるという景観を呈する。近年、この地域にも3反歩1枚の場整備事業が実施されることになり、山形県教育委員会では、県農林部や地元市町村などと協議を重ね、設計その他で止むを得ない遺跡については、昭和48年度から緊急発掘調査を実施してきた。最上川南岸地域での場整備事業に関連する遺跡の発掘調査件数は、昭和58年末現在で22遺跡にのぼる。

22遺跡の中で古墳時代以前に遡るもののは、丘陵寄りないしは丘陵上に立地し縄文時代の遺物を出土する立川町古橋遺跡・櫛引町三穂林E遺跡・同丸山遺跡・朝日村砂川A遺跡の4遺跡のみで、他はすべて平安時代以降のものである。

平安時代以降の遺跡の中で、遺物や遺構からみてもっとも古く位置付けられるのは、藤島町平形遺跡D地点（註1）や渡前遺跡で、9世紀代の年代が想定される。余目町上台遺跡（註2）は、広域農道新設工事に係わる緊急調査であるが、10世紀後半頃の遺物を伴う竪穴住居跡が1棟検出されている。東南隅にカマドをもった一辺が4.5～4.9mの明確な住居跡である。また余目町返吉遺跡からは11世紀に属する掘立柱建物跡が2棟検出されている。

鎌倉時代以降の遺跡では、文献上にもその名を留める藤島町勝楽寺遺跡（註3）が13世紀、平形遺跡G地点や鶴岡市中京田遺跡（註4）が13世紀末から14世紀前半、三川町横川B遺跡や藤島町須走遺跡が14世紀後半に位置付けられる。また酒田市大日塚遺跡や藤島町中山庵寺跡（註5）からは14世紀代に属する中世火葬墓が検出されている。最近調査された余目町五輪塚遺跡の配石遺構も、14世紀頃の中世墳墓の類例と考えられる。

余目町から藤島町にかけては、藤島町藤島城跡（註6）にみられるように、とくに南北朝期における庄内南朝側の拠点として重要な位置を占めていた城館跡が多い。安保氏の居館である余目館（註7）もその一つである。

註1 川崎利夫他「平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書・平形遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第26集 1980年

註2 名和達朗他「上台遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第14集 1978年

註3 菅原謙二郎「勝楽寺遺跡発掘調査報告書」藤島町埋蔵文化財調査報告書第1集 1980年

註4 川崎利夫他「平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書・中京田遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第26集 1980年

註5 菅原謙二郎「中山庵寺跡発掘調査報告書」藤島町埋蔵文化財調査報告書第3集 1982年

註6 佐藤庄一郎「農林・土木事業関係遺跡発掘調査報告書 大日塚・土植遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第52集 1982年

註7 余目町総務課「余目安保氏関係資料」1979年

II. 調査の経緯

1. 調査に至る経過

最上川は庄内平野に入ると東方に位置する出羽丘陵に沿いながら北流し、松嶺付近で大きく西方に蛇行して酒田にいたり、日本海に注ぐ。流域には自然堤防が形成されている。

本遺跡は最上川旧氾濫原に立地し、地目は水田と畠地になっている。標高は約9mを測る。遺跡は昭和38年発行の「山形県遺跡地名表」(註1)に記載登録されており、畠地から水田への転換により須恵器の小塙が出土した。器高70%、口径62%、底径57%を測り、平安時代の集落跡を想定している。また昭和53年発行の「山形県遺跡地図」(註2)にも平安時代集落跡として記載されている。

この地域に、昭和40年代後半から県営ほ場整備事業（最上川地区）が計画されることになり、山形県教育委員会では数年来、県農林部や当該市町村教育委員会など関係機関と協議を行ってきている。本遺跡周辺の余目町廿六木地区東半が昭和57・58年度にはほ場整備事業の施行予定地域となり、その事業計画が昭和56年度に県農林部から提示された。計画によれば、昭和48年に実施した庄内広域宮農団地農道整備事業の分布調査(註3)で発見された廿六木（下台）遺跡、上台遺跡が畠地として施行されることになり、その現地確認調査が昭和56年9月7日に実施された。事業規模や内容については、廿六木・上台遺跡と共に畠地としての整備であるため、遺跡範囲の境界線に用排水路を設置する際、文化財保護側でその工事に立ち合うことで協議が一致した。またこの調査の時点ではほ場整備事業が北方で流下している最上川から南側一帯に施行区域となり、本遺跡や禪律院遺跡がその中に入ることがわかった。このため再度事業側と協議を行い昭和57年秋に、2遺跡の現地確認と試掘調査を実施した。調査の結果、禪律院遺跡では遺跡に隣接する遺構は検出されなかった。千河原遺跡は、東西130m、南北110mの範囲、総面積14,300m²に土壌、溝状遺構、ピットなどの遺構や、赤焼土器・須恵器等の遺物が発見された(註4)。

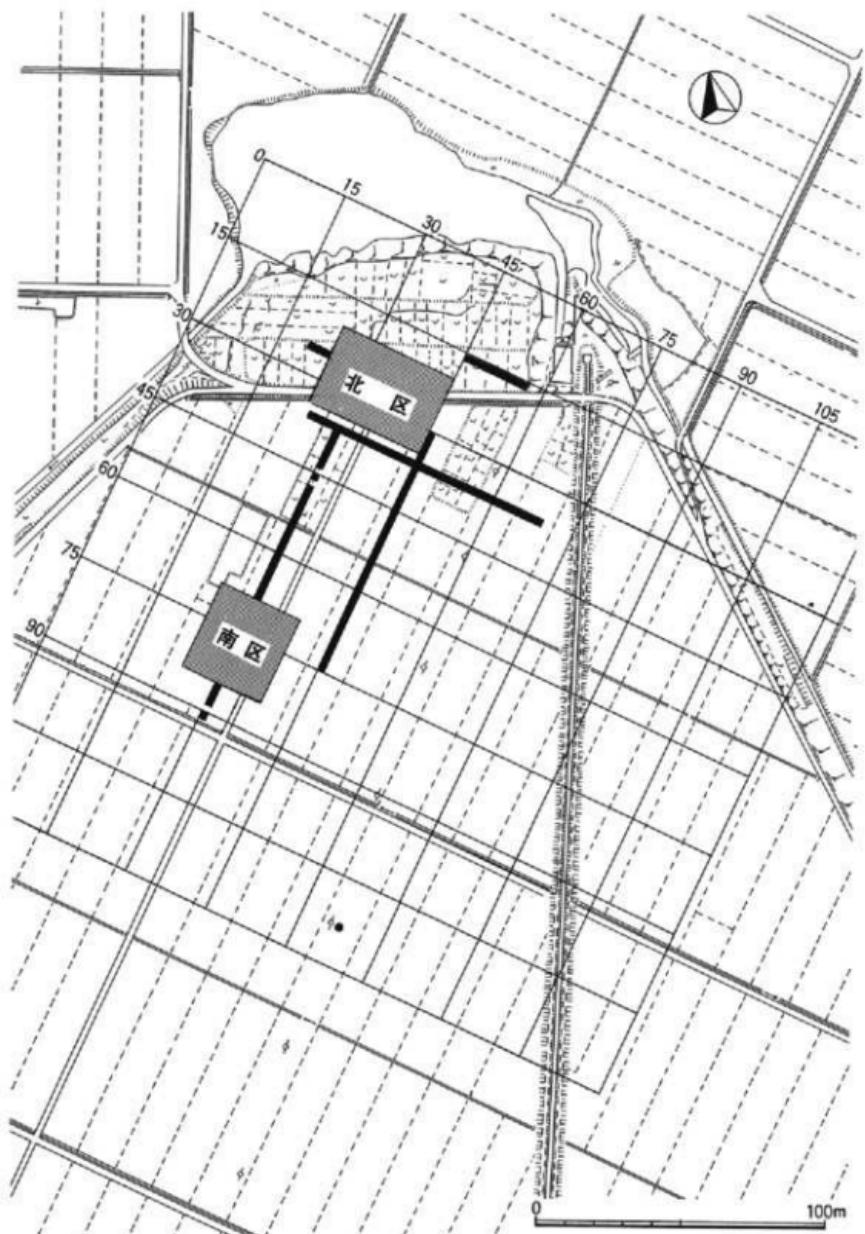
これにもとづき関係諸機関と協議をし、昭和58年度に千河原遺跡は緊急発掘調査を実施することとなり、禪律院遺跡は、調査中に立ち合うことになったものである。調査は山形県教育委員会が主体となり、現地の調査は山形県教育庁庄内教育事務所が担当した。調査期間は昭和58年6月22日～同年9月13日までの間、実質24日間である。

註1 山形県教育委員会「山形県遺跡地名表」 1963年

註2 山形県教育委員会「山形県遺跡地図」 1978年

註3 山形県教育委員会「庄内広域宮農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第1集 1974年

註4 山形県教育委員会「分布調査報告書(10)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第74集 1983年



第2図 グリッド配置図

2. 調査の方法と経過（第2図、図版1）

本遺跡の調査を開始する際、昭和58年度当初に最上川土地改良事務所と工事施行上の問題や調査日程等で協議を行った。協議では工区の施行上、秋工事になると盛土となる区域に重大な支障をきたすことから、工事を開始する以前に調査における精査区域を決定してほしい旨の要望が出された。このことにより調査の進行を4つの段階に分け、最初の第1段階を6月22日から7月1日までとし、遺構・遺物の集中区域の探査に当ることとした。

発掘区は工事計画基本杭（No.14）に合わせた30m単位のグリッド基準線を引き、各単位毎に基準杭を打った。各区の単位は、2m四方を1単位としてX軸（東西軸）は西から東に、Y軸（南北軸）は北から南に第2象限で座標をとった。各グリッドの名称はX軸の数字を先に呼び、例えば、30～25グリッド（G）というように呼称した。南北基準線は磁北に対してN-36°-Wの傾きを測る。設置したグリッドの基本線に対して、6本のトレントを設定（30-30～88G、45-35～88G、25-64-35G、20-29-25G、30-44-20G、45-56-15G）、重機による粗掘りと作業員の面整理を開始した。その結果、調査対象区域の北側の畠地となっている部分で、暗褐色を呈した方形の落ち込みや、楕円形を呈した落ち込みが検出された。また南側の水田地域では、柱穴と考えられるピットや、溝状遺構が検出され、この2地域に精査区を設定することにし、更に遺構の分布を確認した。精査区域は畠地部分（北区）が23-44-19-33G（1,260m²）、南側の水田部分（南区）が24-35-69-84G（768m²）となる。精査範囲が決定したことにより、精査区外は工事の施行を認め、精査区域については第2段階以降の調査まで待つこととなった。

第2段階の調査は、8月22日から同31日までとし、精査区域とした畠地の耕作土を取りのぞくことから始め、北区では方形の形状を呈した遺構が8基、柄鏡状を呈した遺構が1基、溝状を呈した遺構が10条、小さな円形や楕円形を呈した遺構が数基検出された。南区では柱穴と思われるピットが多数と、土壤と考えられる遺構が3基、溝状を呈した遺構が4条検出された。両地区の面整理が終了したことにより、遺構精査は北区から実施し、遺構の検出状況写真撮影、遺構分布略測図作成、遺構番号を付し、第2段階を終了した。

第3段階は、9月1日から9月12日まで北区で検出された方形の遺構は竪穴住居跡と判明し、覆土の堆積状況の断面図実測、カマドや柱穴の精査を進めた。さらに住居跡の完掘状況や層序等を撮影し、平面図をとる。柄鏡状の遺構からは五輪塔の風・火輪の残片や、壇内中央部分からは骨片が出土した。このことから中世以降の墓壇と考えられる。南区では柱穴の組み合わせや土壤の掘り下げ、断面測図、写真撮影を行った。

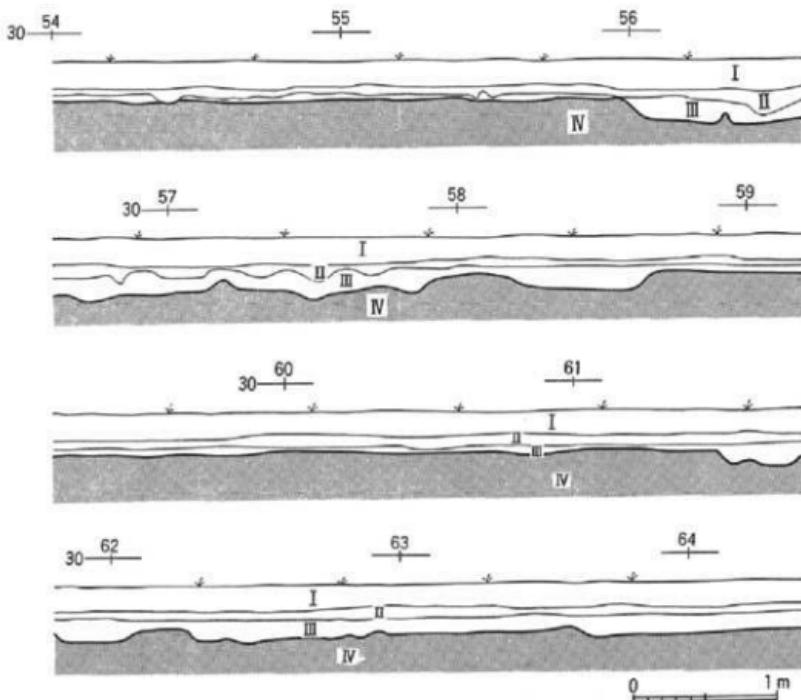
第4段階は9月13日の調査終了日となり、北・南区の全景や各遺構の補足調査や測図作業、写真撮影等を行い、器材を撤収して本遺跡の調査を終了した。

3. 遺跡の層序（第3図）

本遺跡は最上川左岸の旧氾濫原に立地する。遺跡の北方約600mに最上川が西流し、本遺跡の西方1.4km、平岡部落周辺には自然堤防が認められる。遺跡周辺には用排水路などを除いて顕著な小河川は現在認められない。遺跡付近の地形は南東から北西にかけてきわめて緩やかな傾斜を示すが、ほぼ平坦地といってよいものである。

本遺跡の基本的な層序は、東西トレンド50~80~30グリッド東面壁によって観察した。第3図はその一部である。精査南・北区もほぼ同様であるが、北区は畠地なため表土が砂質を呈し、南区ではやや粘性がある。

- | | | |
|-------|---------|-------------------------------------------|
| 第I層 | 茶褐色耕作土 | 水田および畠地の耕作土で、砂分を含み、15~20cmの厚さではほぼ均一に堆積する。 |
| 第II層 | 明褐色砂質土 | 第I層との境界部分に鉄分を含む粗砂層で、5~10cmの厚さで堆積する。 |
| 第III層 | 暗茶褐色粘質土 | 炭化物粒子を含む遺物包含層。10~25cmの厚さで堆積する。 |
| 第IV層 | 黄褐色粘質土 | 黄色味を呈した無遺物層で、ほとんど造構検出面である。 |



第3図 土層図

III. 検出遺構

1. 遺構の分布（第4・13図、図版2）

千河原遺跡の遺構や遺物が分布する範囲は、坪掘り調査の内容を加味すると東西220m、南北240mの総面積52,800m²という広大なものになる。発掘調査をなし得た面積はごく一部であるが、遺構のある程度の分布状況は把握できる。

発掘調査で検出された遺構には、竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡3棟、土壙11基、溝状遺構22条、ピットなどがある。各遺構の検出状況などから千河原遺跡における遺構は、大きく二つの群に分かれる。

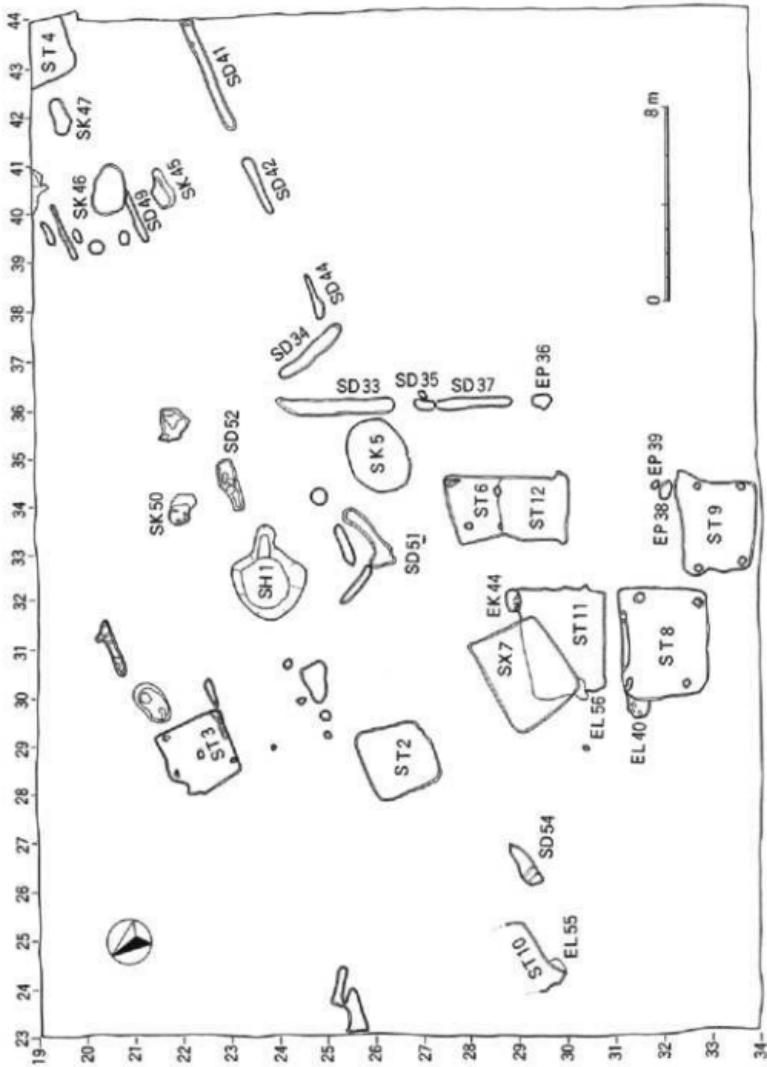
第一は、北区に分布する平安時代の竪穴住居跡を主とする遺構群である。北区の周辺にはやや未調査区域が残っているが、坪掘り調査の内容からもこの地域に竪穴住居跡を主とする遺構がもう少し存在する可能性が高い。とくに北区北東隅で検出されたST4住居跡の北東部はまだ地続きの畠地が残っており、さらに一つの竪穴住居跡群の存在も考慮に入れなければならない。

第二は、南区北半から北西20~35~60~70グリッドにかけて分布する平安時代の掘立柱建物跡を主とする遺構群である。明確な建物跡は3棟だけであるが、南区中央にもEP66・77などの柱穴群があり、もう1~2棟建物跡が建っていた可能性もある。さらに南区の北方18mにもSD30・32溝状遺構などがあり、本遺構群は北方にもかなり延びることが予測される。また南区にはSK28・29・61土壙など比較的遺物を多く出土する平安時代の土壙も分布する。

坪掘りやトレンチ調査の結果では、遺跡の東側と西側は遺物が少なく、遺構もほとんど認められなかった。ただし、ほ場整備工事中に南精査区の南東100mの地点から、赤焼土器長胴甕2個体、壺1個体がまとまって出土した。発見者の話を総合すると、平安時代の合口甕棺を伴なう土壙墓であった可能性が高い。当初の遺跡推定範囲からみれば南はずれている地域であり、この遺構が墓域的なものとして集落からやや離れた所に位置していたものなのか、それともここにもう一つ建物跡などの遺構群が存在していたのか問題の残るところである。

立地面から遺構の分布をみてみると、北区の竪穴住居跡群は眼下の最上川旧氾濫原とは約3mの比高をもつ自然堤防的な場所にあたる。南区の掘立柱建物跡群は、北区より50cmほど標高が下った平地に位置し、地形的には広義の最上川旧氾濫原としての低地にあたる。遺跡の周囲には半月状の旧河道がみられ、それが微高地を形成する一要因となっている。

第4図 北区埋構配置図



2. 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は全部で9棟である。すべて北区から検出されており、竪穴住居跡の向きや検出場所から大きく二つの群に分けられる。

ST2住居跡（第5図、図版3・6）

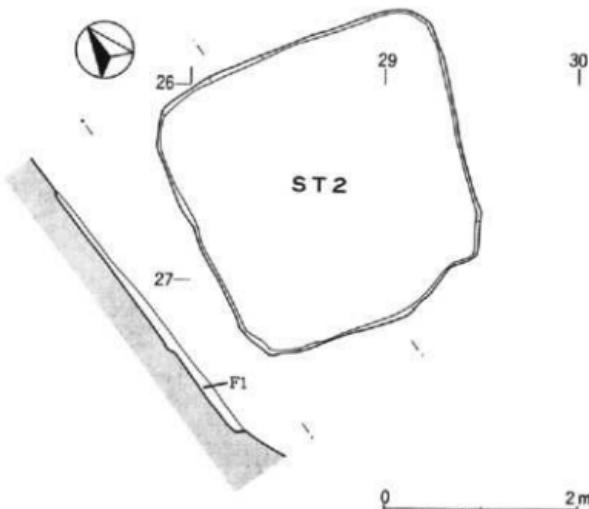
北区中央やや西寄り27~29-25~27グリッドで検出された竪穴住居跡である。平面は隅丸方形を呈し、南北3m、東西3.2mを測る。床面から壁上面までの高さは4~8cmをもち、急激な立ち上がりを示す。住居跡は第IV層黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土と明褐色粘質土が混り合った土質を呈した單一層である。

床面は第IV層を軽く叩きしめただけである。壁周辺の床面は叩きしめが弱く、住居跡中央部分がやや固い状態であった。住居跡内からは、カマドや炉と考えられる施設は検出されなかった。周壁南東部の状態が、他辺の周壁に比べてやや凹凸がある。

住居跡内からは柱穴を構成するようなビットは確認されなかったが、周壁付近に小さなビットが多数あり、主柱をおさえる細い柱の穴かとも考えられる。しかし、本住居跡が確認した部分は畠地であったため、その耕作が深く遺存状態の不良な住居跡である。

覆土中からの出土遺物は、内黒土師器1片、須恵器3片、赤焼土器12片、堅果類の種子と思われるものが1点の17点が出土した（第19図）。

本住居跡の時期は、出土土器により平安時代11世紀中葉頃と考えられる。



第5図 ST2住居跡

ST3住居跡（第6図、図版3・6）

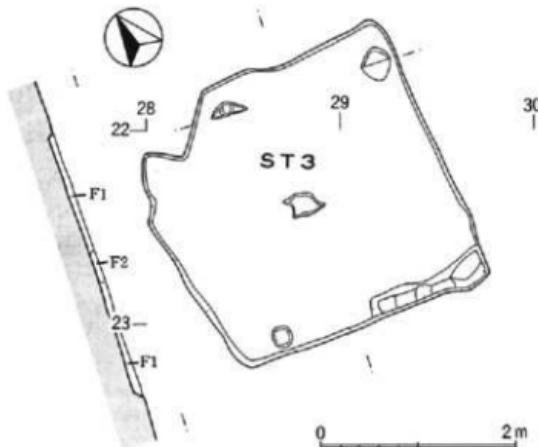
北精査区中央やや北西寄り、ST2住居跡の北方5mに存在する竪穴住居跡である。確認された区は、28・29・21～23グリッドの第IV層上面である。住居跡の平面形はほぼ方形を呈するものと考えられるが、斜面の肩部で確認されたことや、畑の耕作による擾乱を受け、北西隅のコーナーがやや不明瞭である。住居跡の規模は南北2.9m、東西2.8mを測る。住居跡は第IV層の黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土に明褐色粘質土がブロック状に混り合った土質を呈し、畑の耕作が床面の一部まで達している部分がある。

住居跡中央部の床面に径約25～30cmの範囲で焼土が確認されており、炉跡と考えられる。周壁は床面から4～12cmの高さで、ゆるやかな立ち上がりを示す。床面は第IV層を軽く叩きしめてはいるが、擾乱があり、良好な状態ではない。壁添いの床面は叩きしめが弱く、炉周辺は他と比べて固い。周壁南辺の東半には幅20cm、長さ50cm、深さ9cmの溝が確認された。斜面肩部で営なまれた住居跡であることから、斜面上部である住居跡南辺に設けた溝跡と考えられる。

柱穴は住居跡各コーナーで検出され、径20～30cm、深さ3～22cmを測る。主柱穴を各辺の隅柱として置く構造を呈しているものと考えられるが、他に支柱穴と考えられるピット等は確認されなかった。

遺物は覆土中より赤焼土器が9片出土している。赤焼土器長胴甕の体部片（第19図3）が図示可能なもので、あとは細片であった。

出土土器が細片で少量なことから本住居跡の時期は、平安時代10～11世紀と概括するしかない。また上層の包含層からも、それ以前の土器片は検出されていない。



第6図 ST3住居跡

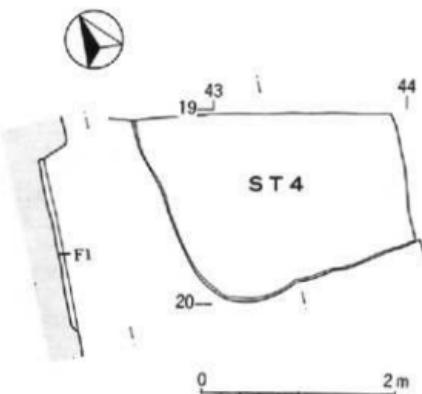
ST4住居跡（第7図、図版3）

北精査北東隅、42・43-19・20グリッドで検出された竪穴住居跡である。住居跡の平面形は、4分の3が未調査区域に入ったためその全容は確認出来ないが、ほぼ方形を呈する住居跡と考えられる。検出された部分

の規模は、南北2m、東西2.5mを測る。住居跡は第IV層の黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土のブロックが、明褐色粘質土に混り合った土質を呈している。周壁は床面から4~7cmの高さで急激に立ち上がる。

床面は第IV層を軽く叩きしめている。壁添いの床面は叩きしめが弱い。

柱穴としての掘り込み部分は確認されなかった。また出土遺物も赤焼土器の細片のみであり、時期は不明である。



第7図 ST4住居跡

ST6住居跡（第8図、図版4・6・7）

北精査区中央やや南東寄り、SX7遺構の東側3mに存在する竪穴住居跡である。住居跡南部3分の1をST12住居跡に掘り込まれており、時期的には古い。確認された区は、33・34-27-30グリッドで、グリッドの南半はST12住居跡の検出区となる。住居跡の平面形は、ほぼ方形を呈するものと考えられるが、南部で重複するST12住居跡によって切られている。しかし、ST12との境界部で、本住居跡の柱穴が踏み固められた状態で確認されており、他の柱穴の位置等を換算すれば、南北2.4m、南北2.6mの広さと考えられる。住居跡は第IV層の黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土に褐色砂質土がブロック状に混在した土質を呈している。

本住居跡にはカマドや炉と考えられる施設は確認出来なかった。周壁は床面から6~8cmの高さで、ゆるやかな立ち上がりを示す。床面は第IV層を軽く叩きしめてはいるが、ところどころに耕作による擾乱があり、良好な状態ではない。壁添いの床面は叩きしめが弱く、住居跡中央部でやや固い床面である。

柱穴は住居跡各コーナー寄りで検出され、径約15~20cm、深さ13~17cmを測る。主柱穴を各辺の隅柱として置く構造を呈しているものと考えられるが、支柱穴となるピットは確認されなかった。

出土遺物は覆土中より赤焼土器2片が出土し、第19図6はその1つである。甕片で時期は重複関係にあるST12住居跡より一時期下るものと考えられる。

ST12住居跡（第8図、図版7）

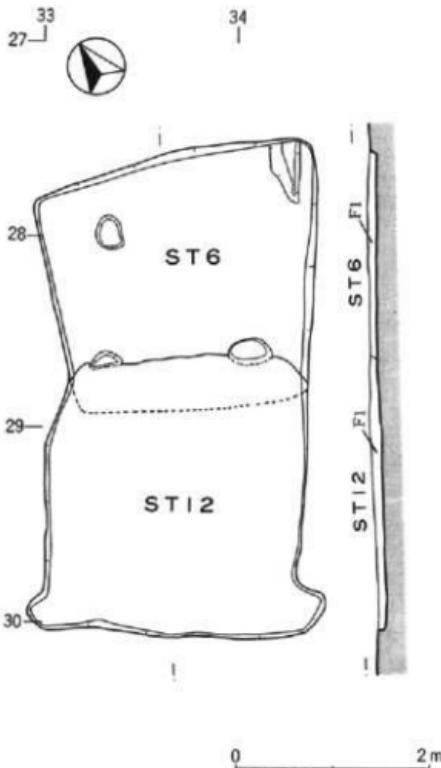
北精査区調査の後半に、ST6住居跡と重複した状態で確認された竪穴住居跡である。確認された区は、33・34-28~30グリッドである。住居跡の平面形は南北にやや長い長方形を呈し、南北2.9m、東西2.4mを測る。覆土は、暗褐色粘質土に赤褐色粘質土のブロックが混った土質を呈している。カマドないし炉跡と考えられる施設は認められなかった。

周壁は床面から5~7cmの高さで、ゆるやかな立ち上がりを示す。床面は第IV層を軽く叩きしめてはいるが、壁添いの床面は叩きしめが弱く、住居跡中央部はやや固い。

柱穴は住居跡南辺の東・西コーナーで検出された。径26~40cm、深さ15~22cmを測る。柱穴はこの2つだけの確認であるが、東西両壁より屋外へ設置

されている。また北側の柱穴はST6住居跡の南側を張り床としていたため、その存在は確認出来なかった。南側と同様な作り方であれば、重複部分が屋外へ張り出すものと考えられる。

出土遺物は認められなかったが、本住居跡が確認された区の上部層である第II層明褐色砂質土層からは赤焼土器8片の出土があり、水田耕作によって覆土中に混在していたものが上面に出たものと考えられる。限定出来るほどの資料ではないが、本住居跡が営まれた時期は平安時代中頃、10世紀代と想定出来る。



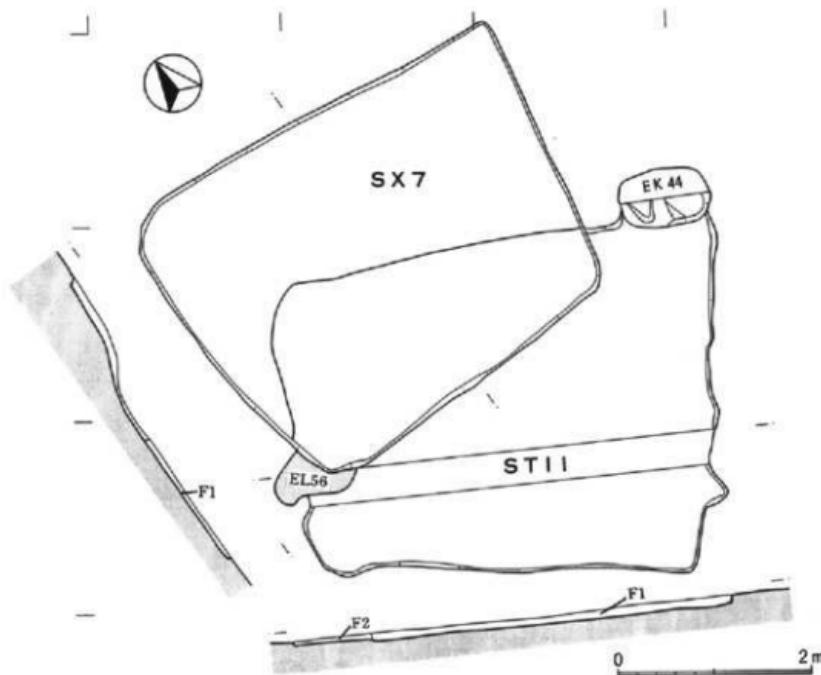
第8図 ST6・12住居跡

SX7遺構（第9図、図版4・7）

北精査区中央やや南西部29~31-28・29グリッドで確認された方形の遺構である。精査区内中央部分に東西に横切る農道があり、この農道部分の表土を取りのぞいた時に認められたものである。当初は住居跡の可能性があり、二分割で覆土の精査を行ったところ、農道部分は確認面から5cm前後で床面となり、水田部分も5cm位で床面となった。農道部分と水田部分との比高差は50cm程あり、住居跡として存在するものであれば、農道部の掘り込みは50cm以上なければならない。北辺中央部を溝掘りしたが、第IV層黄褐色粘質土が続いている。本遺構は住居跡とは認められず、性格不明の遺構として取り上げた。

STII住居跡（第9図、図版4・5・7）

SX7遺構の南半に重複して確認された竪穴住居跡である。検出区は29~32-28~30グリッドである。住居跡の平面形は、やや長方形を呈するものと考えられる。規模は南北3.5m、東西4.3mを測る。

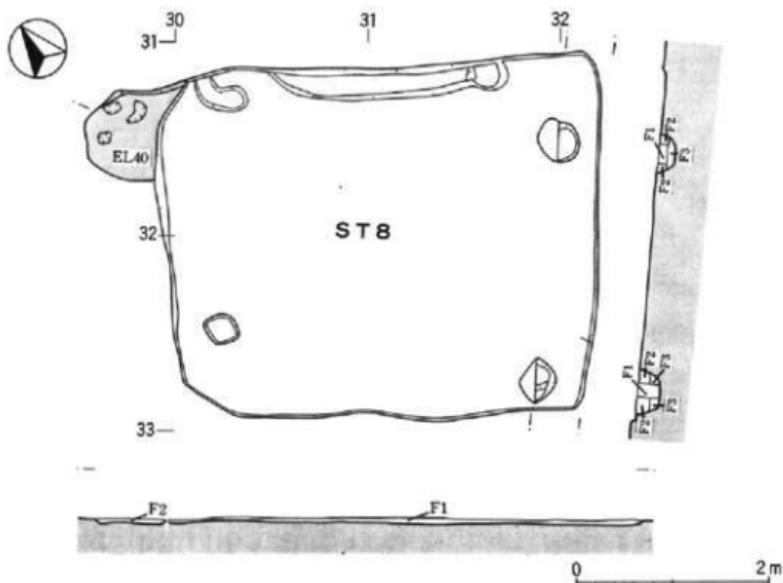


第9図 SX7遺構・STII住居跡

住居跡は第IV層黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土に明褐色粘質土ブロックがまだらに混り合った土質を呈し、水田耕作が一部床面まで達している。住居跡西辺中央やや南側寄りにカマドと思われる焼土の広がりが確認された(EL56)。カマドの上部の大半は水田耕作によって破壊を受け、基底部のみの検出である。カマドは床面直土に粘土によって両袖部を作っていたと考えられるが、右袖部がSX7の南西コーナーによって破壊されている。焼土の広がりは長さ65cm、幅26cmのやや楕円形に広がり、中央部は焼成を受けた痕跡が強く残っている。カマドからは赤焼土器窯の胴部破片が出土している。周壁は床面から3~7cmの高さで急激に立ち上がりを示す。床面は第IV層を軽く叩きしめてはいるが、良好な状態ではない。壁添いの床面は叩きしめが弱く、カマド周辺は他と比べて固い。住居跡北東コーナーに存在する落ち込みEK44は、本住居跡に付属する貯蔵穴と考えられる。南北59cm、東西98cm、深さ42cmを測る。中から赤焼土器、黒色土師器が出土した。柱穴は、床面精査での調査からは検出されなかった。水田耕作によって本住居跡全体が攪乱を受けており、柱穴の存在の決め手となる床面土色の判別が出来なかった。時期は出土土器により、10世紀代に比定される。

ST8住居跡（第10図、図版4・8）

ST11住居跡のすぐ南側70cmほどの間をもって確認された竪穴住居跡である。確認され

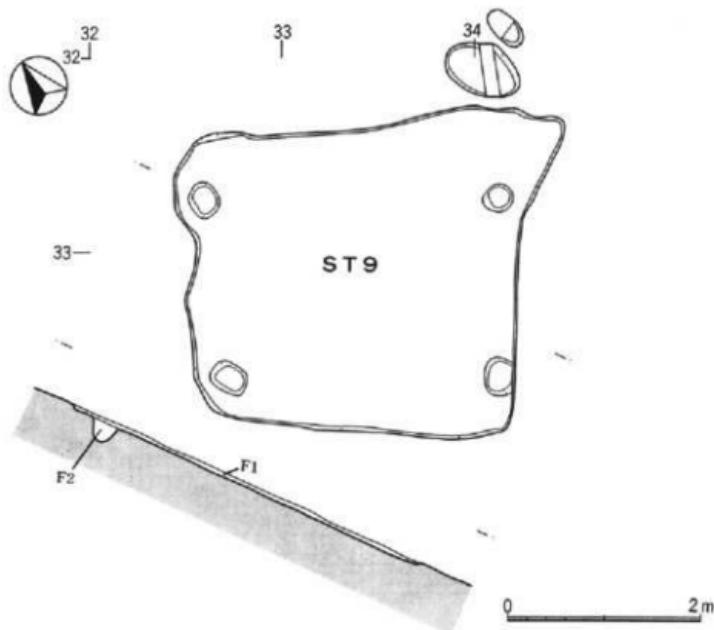


第10図 ST8住居跡

たグリッドは、29~32-31・32グリッドである。住居跡の平面形は東西にやや長方形を呈し、規模は南北3.6m、東西4.4mを測る。

住居跡は第IV層黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土に明褐色粘質土ブロックがまだらに混り合った土質を呈し、水田耕作が床面の一部まで達している。住居跡北西コーナーにカマドと思われる焼土の広がりが確認された(EL40)。カマドの上部の大半は水田耕作によって搅乱を受け、基底部のみの検出である。カマドは床面直上に粘土によって両袖部を作っていたと考えられ、住居跡外へ張り出す。燃焼部からは第19図9~11の變形土器が出土した。周壁は床面から4~7cmの高さで急激な立ち上がりを示す。床面は第IV層を軽く叩きしめている。壁添いの床面は叩きしが弱く、カマドがある北西コーナー付近はやや固い。住居跡北辺壁下には、長さ2.3m、幅38cmに溝を掘り込んでいる。柱穴は各コーナーに径38~42cm、深さ12~21cmで配置している。出土遺物は覆土中より第19図8の赤焼土器腹片や环片などが出土した。ほとんどが細片である。時期はカマド出土の土器により平安時代10世紀中頃と考えられる。

ST9住居跡（第11図、図版5・8）



第11図 ST9住居跡

ST 8 住居跡南東1mに隣接して確認された竪穴住居跡である。検出された区は、32～34-32・33グリッドである。住居跡の平面形はやや隅丸方形を呈し、規模は南北3.0m、東西3.4mを測る。西辺の壁は直線的な掘り込みがなく、北東コーナーも大きく室外へ飛び出している。

住居跡は第IV層黄褐色粘質土を掘り込んで作られ、覆土は暗褐色粘質土に明褐色粘質土のブロックがまだらに混り合った土質を呈している。水田耕作によって床面の一部まで達している部分もある。周壁は床面から4～7cmの高さで急激な立ち上がりを示す。床面は第V層を軽く叩きしめている。壁添いの床面は叩きしめが弱く、住居跡中央部は他と比べてやや固い。カマドや炉と考えられるものは認められなかった。

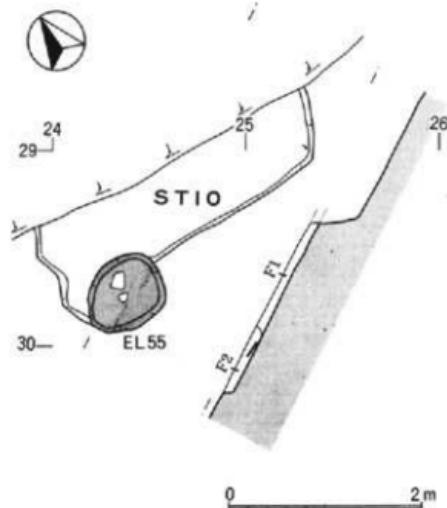
柱穴は各コーナー付近に径26～38cm、深さ8～21cmで配置している。

出土遺物は、赤焼土器4片、須恵器1片、内面を黒色化処理が施されている土師器1片の計6片が出土した。時期は出土土器により、平安時代10世紀と考えられる。

ST10住居跡（第12図、図版5・8）

北精査区西侧やや南部23～25-28・29グリッドで確認された南西部に焼土の広がりをもつ竪穴住居跡である。精査区中央部分に東西に横切る農道があり、上面に敷かれている砂利等を遺跡の構造検出面まで取りのぞくと、農道部分南西側コーナーに焼土の広がりをもつ方形の落ち込み部分（EL55）が確認された。農道部分は周囲より50cm程度高い位置にあるが、本遺跡の立地する地形が、南東から北西にかけてゆるやかな傾斜をもち、精査区内での比高差が40cmある。本住居跡が存在する地域は本来南東地域と同じ位の高さにあったもので、畑地から水田に転化する際本来の地形部分に農道を作り、北側と南側を水田として削平したものである。

南西隅の焼土は東西長98cmで、北側は農道の肩部になるため範囲は不明である。基底部のみの検出で、袖部の長さは不明である。周壁は床面より4～14cmの高さを測る。時期はカマド出土の土器により10世紀中頃と推定される。



第12図 ST10住居跡

3. 掘立柱建物跡（第13図、図版9）

南精査区では掘立柱建物跡3棟、土壙4基、溝状遺構7条、ピット多数の検出を得た。本精査区は、春に実施した第1段階の調査で、土壙2基(SK28・31)と掘立柱建物跡の一部をなす柱列や多数の柱穴が検出されたことにより、精査地域として設定した区である。

遺構の分布状況は、精査区域の北半に集中して認められ、柱穴の組合せにより、掘立柱建物跡が3棟確認された。建物跡3棟はおのおの重複しているが、構成する柱穴内からの出土土器が少なく、時期の限定は難かしい。しかしSB15建物跡のEB81柱穴がSK61土壙によって切られているところから、SK61土壙より一時期古いものとなる。他の建物跡については、明確な時期決定はできない。

またSK61土壙からは、平安時代の土器に混って製塙土器が1点出土している。本遺跡は海岸から内陸部に直線距離で約11km入った所にあり、製塙土器の出土地としては特異な様相を示す。庄内地方では、海岸地域で3カ所の製塙土器を出土する遺跡が確認されているが、海岸より10km以上離れた内陸部での発見は、これまで酒田市境興野遺跡SK26土壙からの出土例(註1・2)のみで、今回が2例目となる。

註1 川崎利夫『「境興野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 1981年

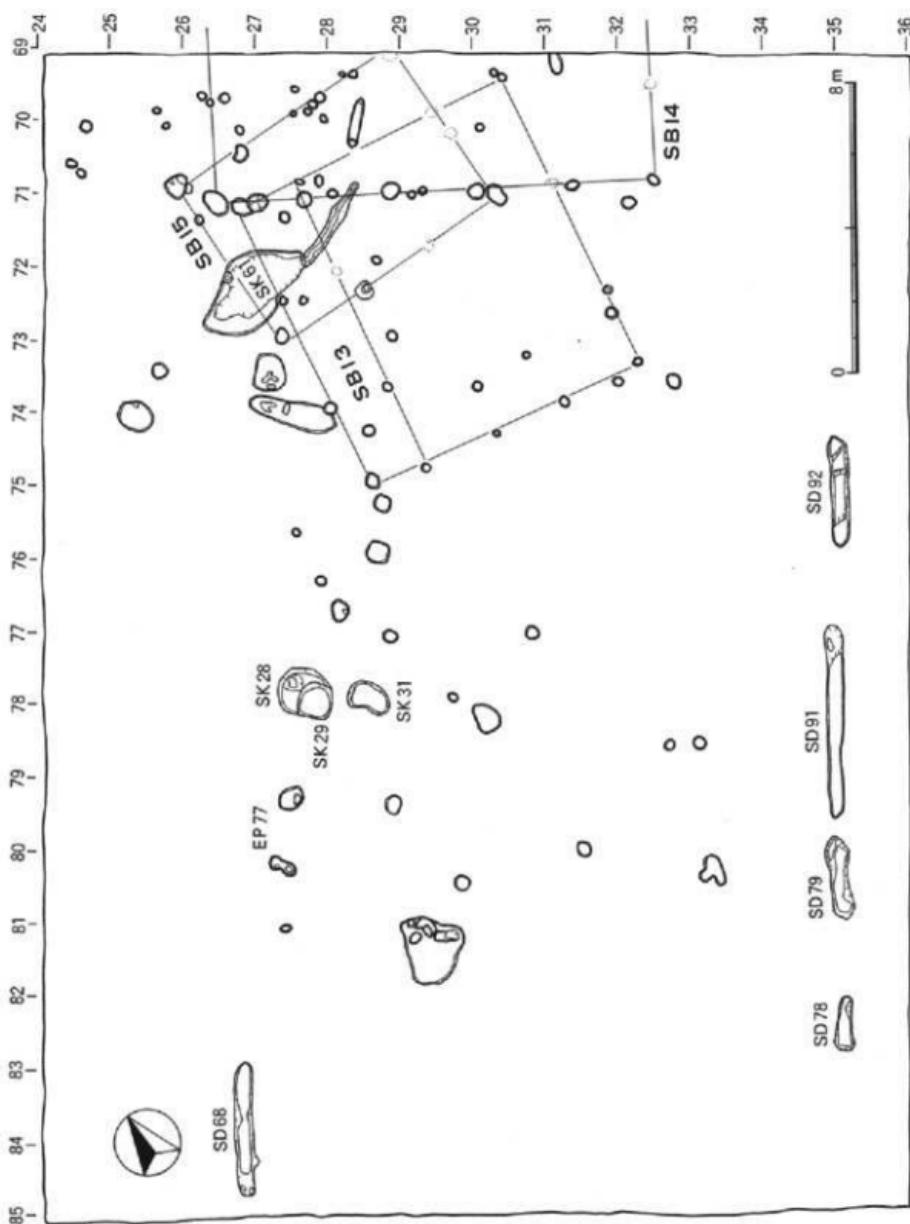
註2 野尻 侃『境興野遺跡出土の製塙土器』山形考古第3巻4号 1982年

SB13建物跡（第14図、図版9）

南精査区北側中央部、26-32-69-75グリッド、第IV層上面で確認された梁行3間、桁行3間の南北棟である。身舎の西側に庇ないし縁東が付くもので、身舎の規模は梁行長が6.4mに1.5mの庇ないし縁東が付き、全長8mとなる。桁行長は8.8mを測る。

柱間距離は北面梁行EB103から106まで2.1m等間(約7尺)を測り、EB106と107間は1.5m(約5尺)の庇ないし縁東部分となる。北面梁行におけるEB104は第IV層上面の精査で検出出来なかった柱穴である。またEB105は、SD110の南端部で重複し、SD110の底面にその掘り込みがあることから一時期古いものと考えられる。南面梁行は身舎がEB85・87~89で約7尺等間、EB84・85間が約5尺の庇ないし縁東部となる。身舎東面桁行は89・90・102・103で2.4m(約8尺)等間である。西面桁行は106・108・109・85で同じ2.4m(約8尺)等間の柱間となるが、EB108の柱穴は面精査の段階で確認出来なかった柱である。EB106とEB109間が約5mを測ることで、桁間が17尺という柱間は考えられず、東面および西面桁間にEB102とEB108を置き、8尺等間としたものである。建物の南北主軸方向は、ちょうど真北を指す。

庇ないし縁東部は、北・南面共に柱間距離は1.5m(約5尺)を測り、桁間は身舎と同様な



第13図 南区遺構配置図

2.4m(8尺)等間である。EB83は、SD63溝状遺構により西側が切られている。柱は抜きとられたり、朽ちて柱根が残っているものはないが、身舎部は柱のアタリなどから直径15cm前後の円柱を利用した可能性がある。

柱穴掘り方内の埋土は、ほぼ3層に分けられ、暗黄褐色粘質土を基調としており、底面から上面までのアタリ部外は黄褐色粘質土をブロック状にした土壤をつめており、柱を支える状態で固くしまっている。アタリ部は、暗褐色粘質土に炭化物粒子を含みやや粘性がある。本建物跡柱穴EB90より赤焼土器壺底部片が出土している。細片で時期の決定は不可能であった。概略的に平安時代としてとらえておく。

SB14 建物跡（第14図、図版9）

南精査区北端中央部、26~32-69~71グリッド第IV層上面で確認された梁行1間以上、桁行5間の東西棟である。身舎の規模は、東・西面梁行EB70・101間、EB75・100間は2.7m(9尺)の柱間距離を測る。東面梁行EB101柱穴は精査時では検出されなかったが、西面梁行EB100と対になる部分として柱を置いたものである。南面桁行は全長12mを測る。柱間距離は、南面桁行EB70~75は2.4m(8尺)等間を測り、梁間は2.7m(9尺)である。柱は直線的に並び、建物跡の南北主軸方向は真北を基準としてN-25°30' Eである。

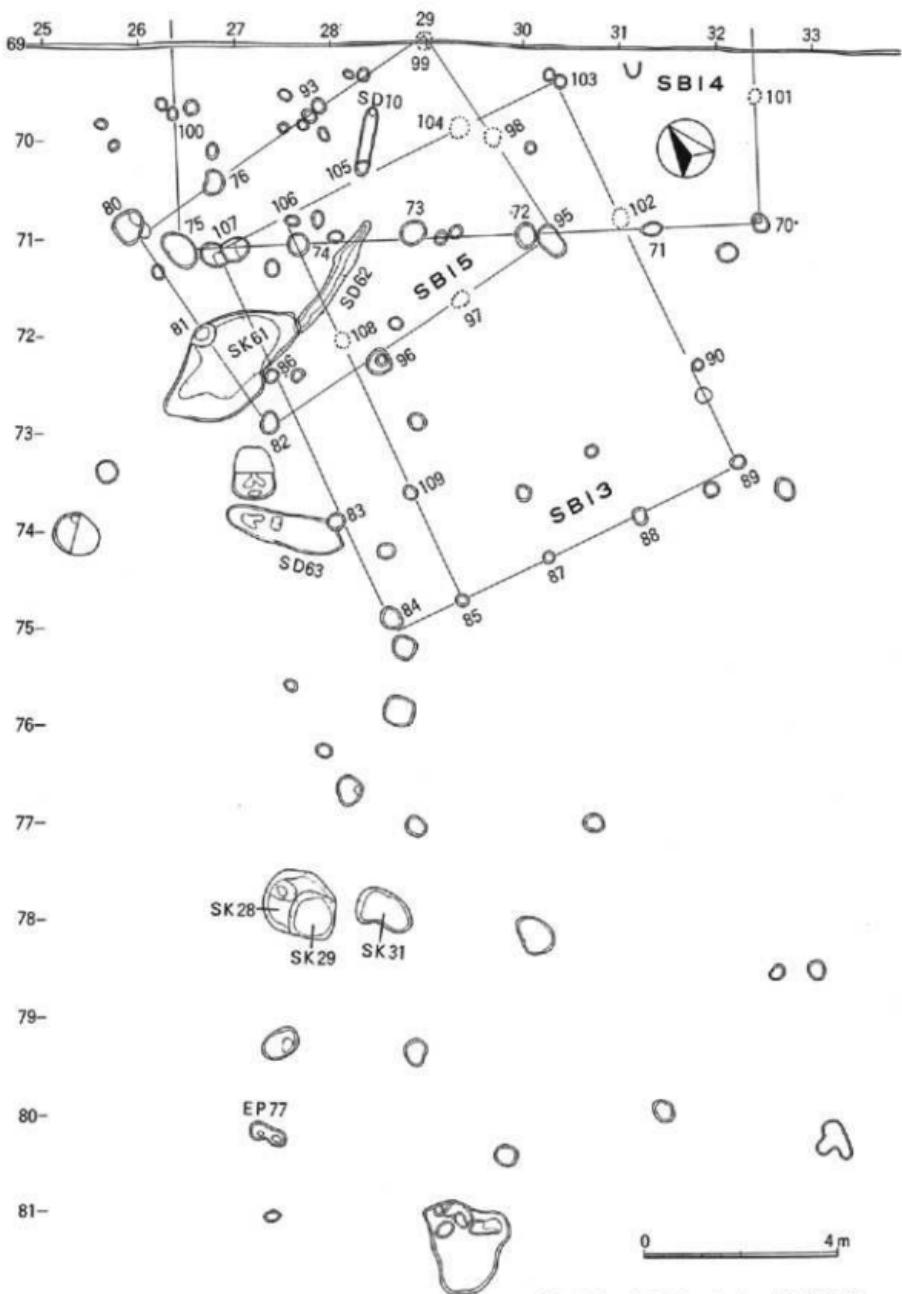
柱穴掘り方は直径36~60cm、検出面からの深さ18~25cmの円形ないし椭円形を呈する。柱は抜きとられたり、朽ちて柱根が残っているものはないが、柱のアタリなどから直径15~20cm前後の円柱を利用した可能性がある。柱の埋土はほぼ3層に分けられ、暗褐色粘質土を基調としており、柱アタリ部は炭化物粒子、赤色粒子を含む黒褐色粘質土である。アタリ部周囲の埋土は、黄褐色砂質土と暗褐色粘質土、濁黄褐色粘質土ブロックを交互に固く踏み固めており、柱が倒れないよう支える状態となっている。

本建物跡柱穴から出土遺物は検出されなかった。建物跡が検出されたグリッド包含層中からは、赤焼土器、須恵器、内面を黒色化処理が施された土師器などが出土しており、他の建物跡と同様、時期は概略的に平安時代としてとらえておく。

SB15 建物跡（第14図、図版9）

南精査区南端中央部やや西寄り、25~30-69~72グリッド第IV層上面で確認された梁行2間、桁行3間の東西棟である。身舎の規模は梁行長が4.8m、桁行長が7.1mを測る。

柱間距離は西面梁行EB80・81・82が2.4m(8尺)等間、南面桁行82・96・97・95が2.7m(9尺)等間となるが、EB97は精査時で検出されなかった柱穴である。北面桁行はEB80・76・93・99が9尺等間にあるが、EB99柱穴は本調査区域外に存在するものと考えら



第14図 SB13・14・15建物跡

れる。28-69 グリッド北面層序の観察では掘り方の範囲が幅25cmに確認されており、本建物跡北東隅の柱穴となる。東面梁行EB98は面精査において検出できなかった柱であるが、EB95と99の距離が4.8mあることから中間の2.4m(8尺)の部分においていたものである。西面梁行EB81柱穴はSK61土壌と重複している。SK61土壌の精査中に検出したもので、SK61土壌の北側壁面に径25cm、深さ18cmの掘り込みであった。先後関係はEB81柱穴が崩壊後にSK61土壌が當なまれたものである。

柱穴掘り方は、直径25~55cm、深さ12~26cmの円形ないし梢円形を呈する。柱は抜きとられたり、朽ちてしまったりして残っているものはないが、柱のアタリなどから直径18cmほどの円柱を用いた可能性がある。本建物跡を構成する確認された柱穴のうち、北面桁行のEB80・76・93からは赤焼土器・須恵器片が出土した。

柱穴掘り方の埋土は濁黄褐色粘質微砂で、柱アタリ部の埋土は炭化物粒子を多く含む暗褐色粘質土である。アタリ部周囲は濁黄褐色粘質土を基調に、黄褐色砂質土と暗褐色粘質土、濁黄褐色粘質土ブロックを交互に固く踏み固めており、柱が倒れないような施し方である。柱は直線的に並び、建物の東西主軸方向は真北を基準にしてN-10°-Wを測る。

本建物跡柱穴3カ所から計7片の土器片が出土している。土器は赤焼土器6片、須恵器1片であり、第19図15・16は柱穴内からの出土土器である。またEB81柱穴はSK61土壌と重複関係にあり、SK61土壌の出土土器を観察するとその時期は平安時代11世紀前半頃と推測され、EB81柱穴がSK61土壌より先に當なられた柱穴であることなど、出土土器により、本建物跡の時期は平安時代10世紀後半頃と推定される。

4. SHI墓壙（第15図、図版10・11）

北精査区中央やや北寄り31~33-22~24グリッド、第IV層上面で確認された墓壙である。平面形は柄鏡状を呈し、断面形は逆台形を呈している。規模は、南北2.8m、東西2.75mの重みがある不整の円形を呈し、東側に幅1m、長さ145cmの掘り込みがある。墓壙の最深部で98cmを測る。覆土は7層に分かれ、F1層は茶褐色粘質土層で炭化物粒子を多く含む。F2層は黒褐色粘質土層で炭化物粒子を多く含む。F3層は黒褐色粘砂土層で炭化物粒子や黄褐色砂質ブロックを含む。F4層は黄褐色砂質土ブロックで若干の炭化物を含む。F5層は黒褐色粘質土層で、黄褐色砂質土の小ブロックを含む。F6層は濁明黄褐色砂質土層で地山の黄褐色砂質土層との漸移層とも考えられる。F7層は濁黄褐色粘砂土層である。

墓壙の周壁は北側で急激に立ち上がり、西と南ではゆるやかに立ち上がる。東側は柄鏡状となる部分であるため、段を作りながら急激に立ち上がる。底面はやや平坦で、起伏が少ない。遺物としては、F2層より第21図にある五輪塔の空・風輪の一石で作られた残欠

部分が出土し、その他、水輪か地輪の残欠と考えられる表面が磨かれた石が多くある。これと同時に、人頭大位の大きな自然石も出土している。

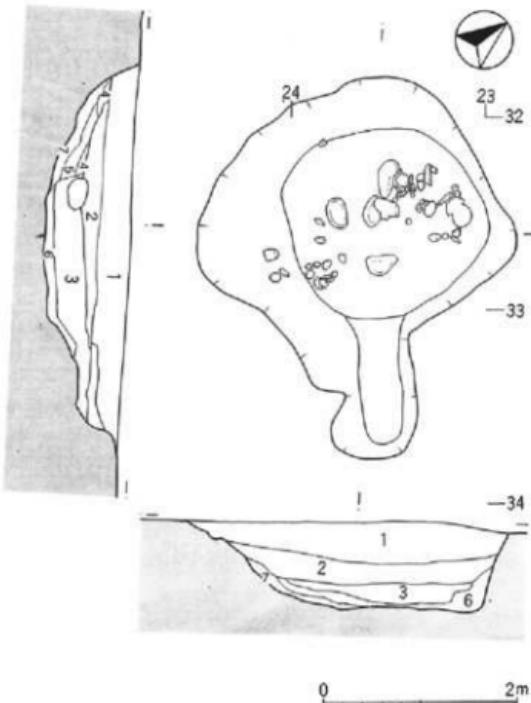
またF 1層中からは須恵器壺片や赤焼土器环・壺片が出土している。墓壙中心部のF 2層中からは第20図にある舟釘と呼ばれる断面が四角で、頭部がカギ状に曲がった釘片が多数出土し、骨片も検出された。

この時点で平面とともに、断面による観察も行ったが、設置されたと考えられる棺等の状態は判別出来なかつ

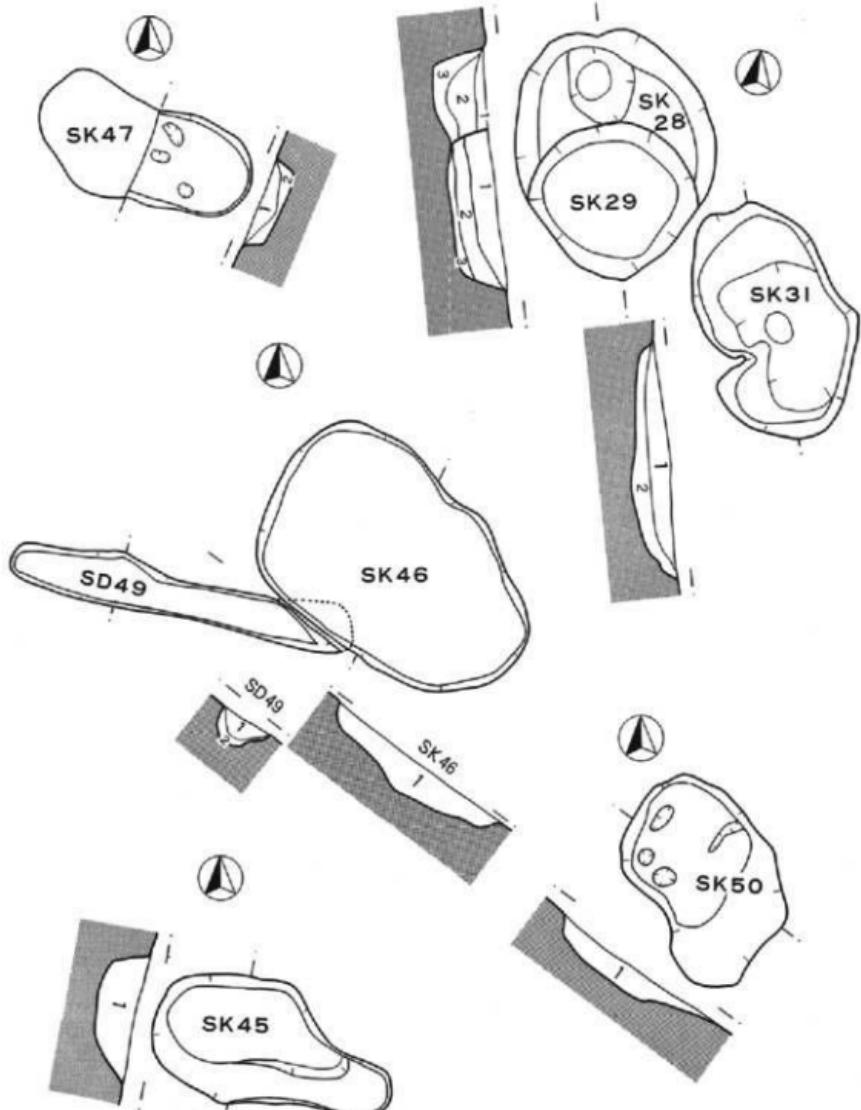
た。しかし、壙底部のF 6層上面で、わずかではあるが棺が置かれたと考えられる土層の変化が径70cm位の円形ないし椭円形に見られた。出土遺物の五輪塔や釘などにより、本墓壙の時期は、鎌倉～室町時代頃と考えられる。墳丘や積石の有無等は、耕作による削平が著しく不明である。

5. 土 壙 (第16図、図版12・13)

調査で確認された土壙は10基を数える。これらは平面の形状で2つに分れる。A類は平面形がやや円に近い形を呈するもので、B類は長楕円形を示すが、歪つな形状を呈しているものである。以下に類別して述べるが、B類に類別出来るSK61土壙は、本遺跡最大の遺物出土量を示し、器種も多様にあることから別に稿をおこし記述する。



第15図 SHI墓壙

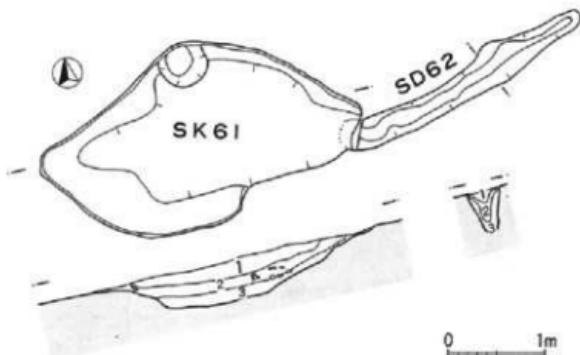


第16図 土 壤

A類　円形を呈し、断面形が台形を呈する直径100~150cm前後の比較的小さな土壌をA類とした。SK28・29土壌がこの仲間である。この2つの土壌は互いに重複関係にあり、断面の観察によりSK28土壌をSK29土壌が切っていることが判明した。形状は底面が平坦で、周壁は急激な立ち上がりを示す。両土壌ともに覆土は3層に分かれ、SK28土壌F1層は黒褐色粘質土層で炭化物粒子・焼土粒子を含む。F2層は暗黒褐色粘質土層で、炭化物、焼土ブロックを多く含み粘性が強い。F3層は黄褐色粘砂土層で第IV層との漸移層と考えられる。SK29土壌F1層は濁黄褐色砂質土層で炭化物粒子、黄褐色粘質土ブロックを含む。F2層は、黒褐色粘質土層で炭化物粒子を含む。F3層は濁黄褐色粘砂土層である。

遺物は、SK28土壌から内面黒色化処理された土師器の壺、赤焼土器壺・甕・壗、SK29土壌から須恵器壺、赤焼土器壺・甕・壗などが出土している。時期はSK28土壌が10世紀後半頃に、SK29土壌はそれより後の10世紀末葉頃に比定される。

B類　本類の中には近代の畑作時によるゴミ捨ての穴も入る。第16図のSK45・46・50土壌はそれにあたり、中から近代の陶磁器や肥料袋等が出土している。平安時代の土壌としてはSK31・47土壌などがこの類となる。SK31土壌は断面形が皿形となり、やや船底状を呈する。覆土は2層に分かれ、F1層は濁黄褐色砂質土層で炭化物粒子を含みやわらかい。F2層は暗褐色粘質土層で、炭化物粒子、土器片を含む。土器はいずれも小片で



第17図 SK61土壌

時期は概略的に平安時代としてとらえる。SK47土壌は不整の楕円形を呈し、覆土は2層に分かれ。F1層は炭化物粒子を含む黄褐色砂質土層で、竪穴住居跡の覆土と同一である。出土遺物はないが、覆土からみて平安時代に属するものと考えられる。

SK61土壌（第17図、図版14）

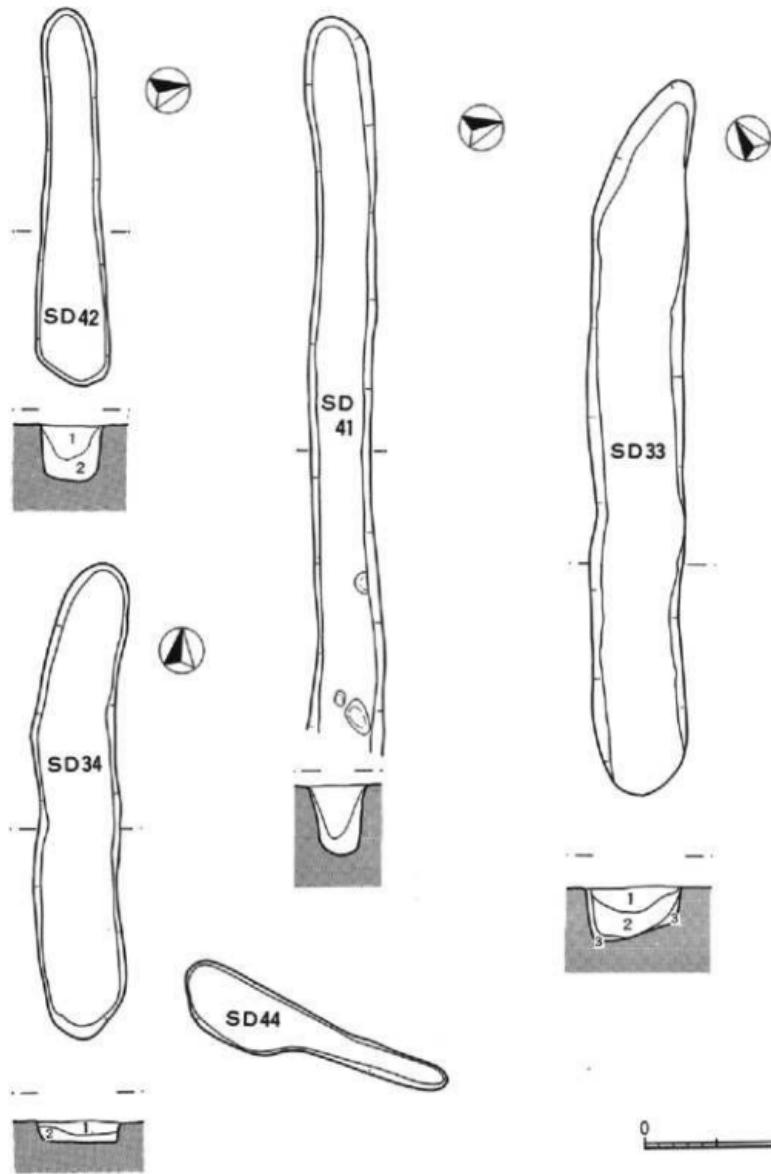
南精査区北側、SB13・14・15建物跡と重複して確認された菱形の角が丸くなったような不整の楕円形を呈する土壌である。壁面は西側で急激に立ち上がり、他はゆるやかな立ち上がりをもつ。底面は船底状を呈する。東側で、SD62溝跡と重複している。重複関係は、SD62溝跡を本土壌が切っている。覆土は3層に分かれ、F1層は明褐色砂質土層、F2層は黒褐色砂質土層で、炭化物粒子や赤色粒子を含み、F1層よりは土器の出土量が少ない。F3層は濁明褐色砂質土層で、若干の炭化物粒子を含む。土器の出土量は少ない。

本土壌からの出土土器は総数321片を数える。F1層では286片と最も多く、F2層では30片、F3層では2片となる。しかし、2・3層中からは比較的大きな破片や1個体になるものが多く出土しており、短期間に埋没したものと考えられる。遺構の性格としては、平安時代のゴミ捨ての土壌と推測される。出土遺物の中には、海岸線より内陸部へ11kmほど入った本土壌から製塙土器の出土があり、特異な例として上げられる。本土壌の時期は出土土器により、平安時代11世紀前半頃に比定される。

6. 溝状遺構（第18図、図版15）

調査で確認された溝状遺構は22条を数える。南北に走るものと、東西に走るもののがみられる。SD41・42・44は北精査区中央部に東西一列に並ぶ溝状遺構である。SD41は、幅約45cm、長さ5m以上あり、精査区外へ延びる。深さは47cmを測り、覆土は2層に分かれ。F1層は茶褐色粘質土で炭化物粒子を含む。F2層は黒褐色粘質土で、炭化物粒子、赤色粒子を多く含む。SD42・44溝状遺構も同様な覆土を示している。断面形はU字形を呈し、覆土中からは赤焼土器片、磁器片が出土している。これらの出土土器は細片で、磨滅が著しい。時期は近世以降の新しい頃である。その他、東西になるものとしてはSD51・52・54溝状遺構がある。これら溝跡の覆土中には土器片がやまとまって出土しており、その時期は10世紀中葉から11世紀前半にかけての所産と考えられる。

南北に走ものは、南区に多く検出されている。SD68・91・92溝状遺構もこの類に入る。形状は東西に走るものと同様である。これらの溝跡の覆土中からは細片ではあるが土器片の出土がある。時期は10~11世紀である。その他にはSK61土壌に切られたSD62溝状遺構がある。時期はSK61土壌よりやや古い10世紀後半頃と考えられる。



第18図 溝状造構

IV. 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして12箱ほどである。土器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品、植物種子などがあり、総点数は1,759点を数える。遺物の中では赤焼土器が1,431点と大半を占め、ついで須恵器187点、土師器41点、陶器31点と続く。

遺跡のある場所は開田によてもとの地形がだいぶ削平されているため、土器がまとまって出土するのは土壤や整穴住居跡のカマド周辺に限られる。ただし、は場整備の工事中に南精査区の南東100mの地点から、赤焼土器甕が2個体と同窓1個体がまとまって出土している。発見者の話を総合すると土壤からの出土とも考えられるが、出土状況が確認出来なかつたため、便宜上、包含層出土の遺物の中に含めて記述する。

遺物のうち、土壤や柱穴などの遺構内から出土した遺物が709点、各グリッドの上層から出土し包含層出土のものとして取り上げた遺物が1,050点で、比率としては遺構内出土のものがやや少ない。南北両精査区では、南区の方から遺物が多く出土する。

なお挿図中の出土遺物番号と図版の遺物番号は同一であり、これらの観察表(表1～6)を各節の途中に付した。

1. 穴住居跡出土の遺物 (第19図、表1、図版16・17)

9棟の穴住居跡のうち、ST 4住居跡を除く8棟の住居跡の埋土から、少量ずつ遺物が出土してある。総破片数80点を数え、ST 2住居跡から桃の種子が1点、ST 6住居跡から炭化物が1点出土している他はすべて土器である。覆土が浅いためほとんどが覆土1層からの出土であるが、ST 8・10・11住居跡はカマド内からも土器が出土している。

住居跡から出土した土器は、土師器・須恵器・赤焼土器の3つに大別できる。量的には赤焼土器が84.6%を占め、土師器と須恵器は各々6.4%、9.0%と少ない。

まずEL40カマド内から4個体の土器(第19図8～11)が出土したST 8住居跡についてみてみる。器種はすべて赤焼土器の小形甕で、8と9の口縁部はやや外反している。10の底部は平底で、切り離しが回転糸切りによる。時期は平安時代10世紀中頃に比定される。

つぎにST 2住居跡からは、内面がヘラミガキのち黒色化処理されている平底の土師器甕(1)、須恵器甕・同蓋、赤焼土器甕・同甕(2)が出土している。細片がほとんどであるが、平底の内黒土師器甕の存在や他の土器の組み合せからみて、本住居跡の時期も10世紀中頃に比定される。

ST 3住居跡からは、赤焼土器甕・同小形甕・同甕(3)が出土している。すべて細片

であり、時期は10~11世紀頃と幅広くおさえることしかできない。ST 4住居跡からは遺物の出土がまったくなく、時期は不明である。ST 6住居跡からは、赤焼土器壺(4)と炭化物が各1点出土しているのみである。赤焼土器壺は口径に比してやや器高が高い平底のもので、これ1点の資料での速断は危険であるが、時期は10世紀中頃と推定される。

ST 9住居跡からは、内面が黒色化処理された土師器壺と、須恵器壺・赤焼土器壺・同壺が出土している。すべて細片で図化し得るものはない。時期は10世紀頃と推定される。ST 10住居跡からは、EL55カマド内から赤焼土器壺(12)などが出土している。壺は口縁部が外反し、頸部外面に範削りにみる窪みを有するもので、内面に同心円状のアテ痕、外面に条線状の叩き目が施されている。時期は10世紀中頃に比定できる。ST 11住居跡は、北東隅のEK44土壙から内面が黒色化処理された土師器壺と、須恵器壺・赤焼土器壺・同壺が出土している。すべて細片であるが、土器の組み合せなどからみて、時期は10世紀頃と推定される。ST 12住居跡からは、内面が黒色化処理された土師器壺と、須恵器壺、赤焼土器壺・同壺(13)が出土している。壺は口縁部片のみであるが、形態的には12と類似している。時期は10世紀中頃に比定できる。

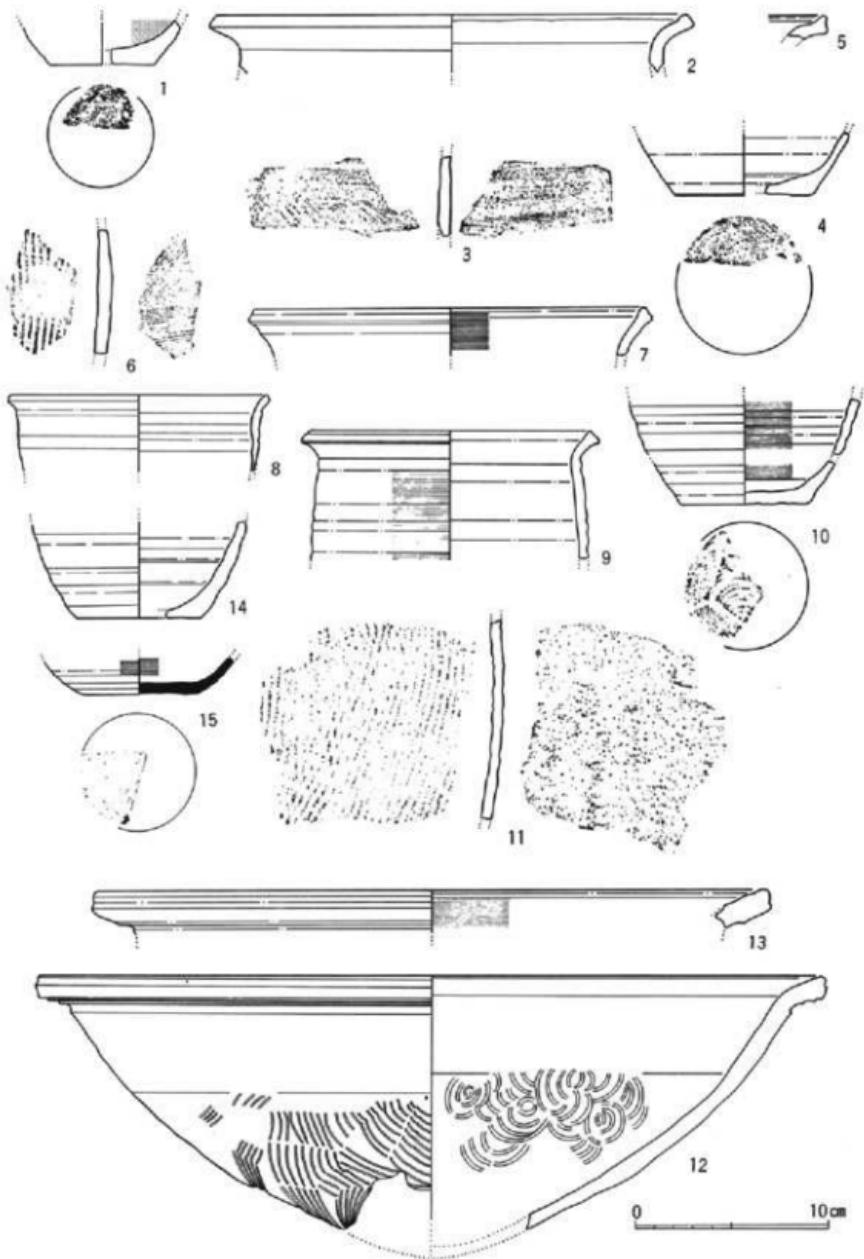
2. 挖立柱建物跡出土の遺物（第19図、表1、図版17）

掘立柱建物跡を構成すると思われる柱穴のうち、18カ所の柱穴の埋土から遺物が出土している。総点数が29点と少ない上に、明らかに建物跡を構成する柱穴内からの遺物の出土は8点と微量である。

南区では3棟の掘立柱建物跡が検出されているが、そのうちSB13建物跡の東面桁行E B90から土器が1点出土している。赤焼土器小形壺の底部片（第19図14）で、底部の切り離しは回転糸切りによる。これ1点での時期的な限定は、平安時代と概括する以外困難である。SB14建物跡を構成する柱穴からは、遺物の出土がまったく認められなかった。

SB15建物跡は、北面桁行のEB80・76・93の三カ所から土器が7点出土している。須恵器壺・赤焼土器小形壺・同壺などがあり、須恵器壺(15)の底部切り離しは回転糸切りによる。赤焼土器壺の口縁部の形態は第19図13とほぼ同様である。また遺物の出土はないが、西面梁行中央のEB81はSK61土壙より古い時期のものであることが確認されており、後述するSK61土壙の時期（11世紀前半）よりは時期が下らない。これらのことから、SB15建物跡の時期は10世紀後葉頃と推定できる。

北区では竪穴住居跡以外に、精査区北西部からいくつかのピットが検出されている。このうちEP21~27の7カ所の埋土から計10点の土器片が出土した。内黒の土師器壺、赤焼土器壺などがある。すべて細片で、時期的な限定は困難である。



第19図 住居跡・建物跡出土土器

表1 住居跡・建物跡出土土器観察表

遺物番号	器種	計測値(%)		色調	胎土	焼成	底部切離	調査枝法・備考	出土地点・土層
		口径	底径						
1	土師器	环	(55)	赤褐色	粗砂混	良		内面ミガキ 黒色化	ST 2-F1
2		甕	30	赤褐色	粗砂混	良		口縁部叩き削進で消し	ST 2-F1
3		甕		赤褐色	石英砂	良		外面条縞状叩き 内面ナグ痕	ST 3-F1
4		环	(70)	赤褐色	砂粒混	良			SX 5-F1
5				赤褐色	粗砂混	不良			SX 5-F1
6				赤褐色	石英砂	良		外面部状叩きとハケ目 内面ハケ目	ST 6-F1
7		甕	(203)	25	赤褐色	粗砂混	良		SX 7-F1
8		甕	(136)	40	赤褐色	粗砂混	良		ST 8-EL40
9				(145)	65	明赤褐色	粗砂混	良	外面部状叩きとロフロ痕 内面ハケ目
10					65	赤褐色	粗砂混	良	外面部状叩きとロフロ痕 内面ハケ目
11						明赤褐色	粗砂混	良	外面部状叩きと内面裏板のアテ痕
12		甕	(400)	130	灰白色	粗砂混	良	外面部明瞭な条縞状叩き 内面同心円状のアテ痕	ST10-EL55
13			(352)		赤褐色	粗砂混	良		ST12-F1
14		甕	65 (49)	赤褐色	粗砂混	良	赤切り		EB80(SB11)-F1
15	須恵器	环	50 (19)	灰白色	粗砂混	良	赤切り		EB76(SB15)-F1

3. SH1墓壙出土の遺物 (第20・21図、表2、図版18・19)

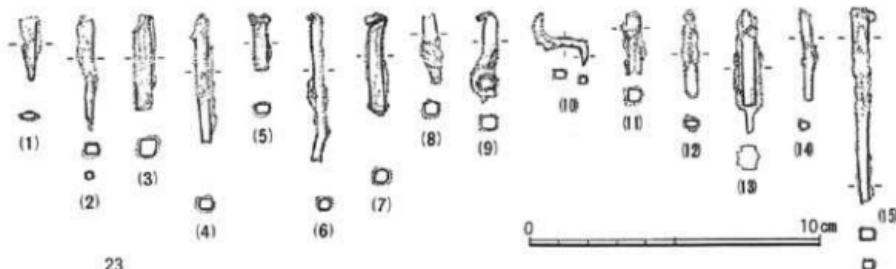
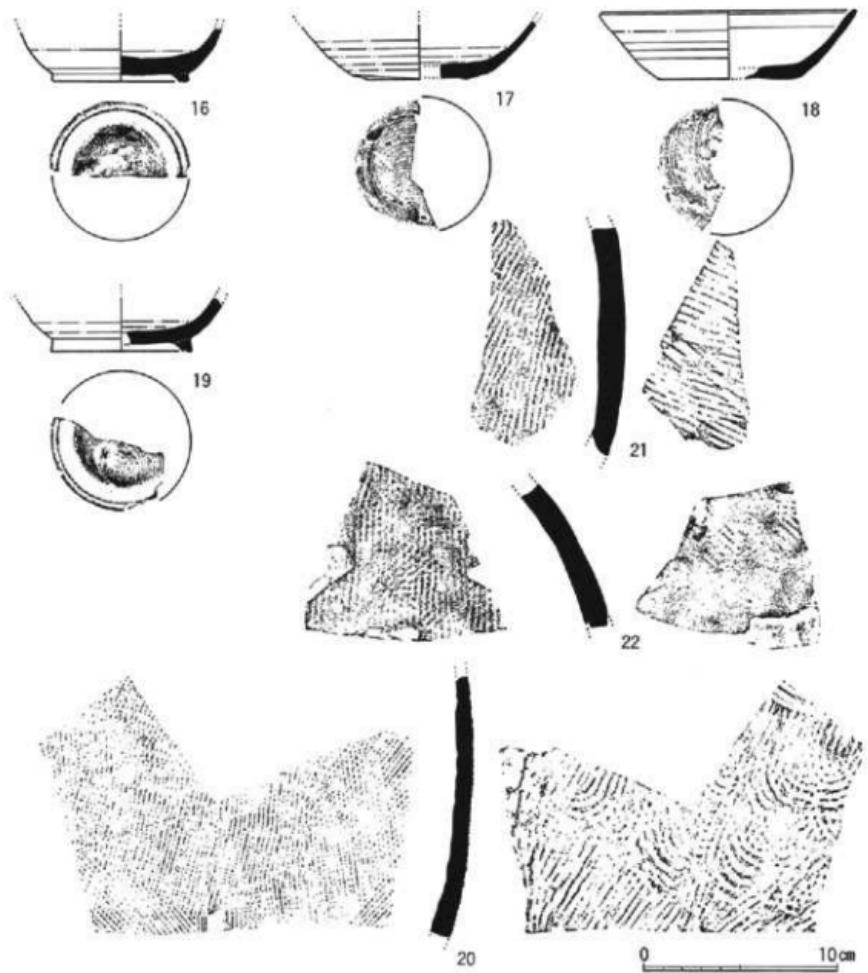
SH1墓壙からは182点の遺物が出土している。本墓壙の埋土は7層に分けられるが、最上層の埋土1層の出土遺物が135点と大半を占め、このほか埋土2層から19点、埋土4層から16点の遺物が出土している。下層の埋土3・5・7層からの遺物の出土はみられない。土層断面等の観察結果からみて、当初埋土4・5・7層が堆積し、つぎにこれらを掘り込んで埋土3・6層が埋められ、最後に埋土1・2層が全体に埋められた状況を示す。

埋土2層からは須恵器と赤焼土器が計19点、埋土4層からは須恵器と赤焼土器合せて12点のほか五輪塔の残片と思われるものと釘状の鉄製品が各1点出土している。

埋土1層から出土した遺物には内黒土師器環・須恵器環(第20図17・18)・同高台付環(16・19)・同甕(20~22)・同壺・赤焼土器環・同甕・同壺、鉄製品(23-1~15)、五輪塔(第21図24-1・2)、骨片などがある。量的には赤焼土器や須恵器・土師器の平安時代の土器が80%以上を占めるが、埋土の土層観察や五輪塔の存在などから、これらは二次的に混入した遺物と考えられる。

鉄製品は長さ2~6.7cm、幅4.5cm前後の断面形が四面体をした釘状のもので15点出土している。23-6・7・9にはL字形に曲る頭部が残っている。「舟釘」と呼ばれるものの一種であろう。埋土下部に直径50cm、深さ40cm前後の略円形の掘り込みがみられたことから、座棺のような木製の棺が置かれ、その止め具としてこれらの釘が使われた可能性がある。

この上に長径約30cmの河原石が5個置かれており、石のすぐ下から骨が15片まとめて出土した。いずれも長さ1.5cmほどの小片であり詳しい識別は困難であるが、人の頭蓋骨や大腿骨の一部と推定されるものがある。



第20図 SHI墓出土遺物

表2 SHI墓壙出土遺物観察表

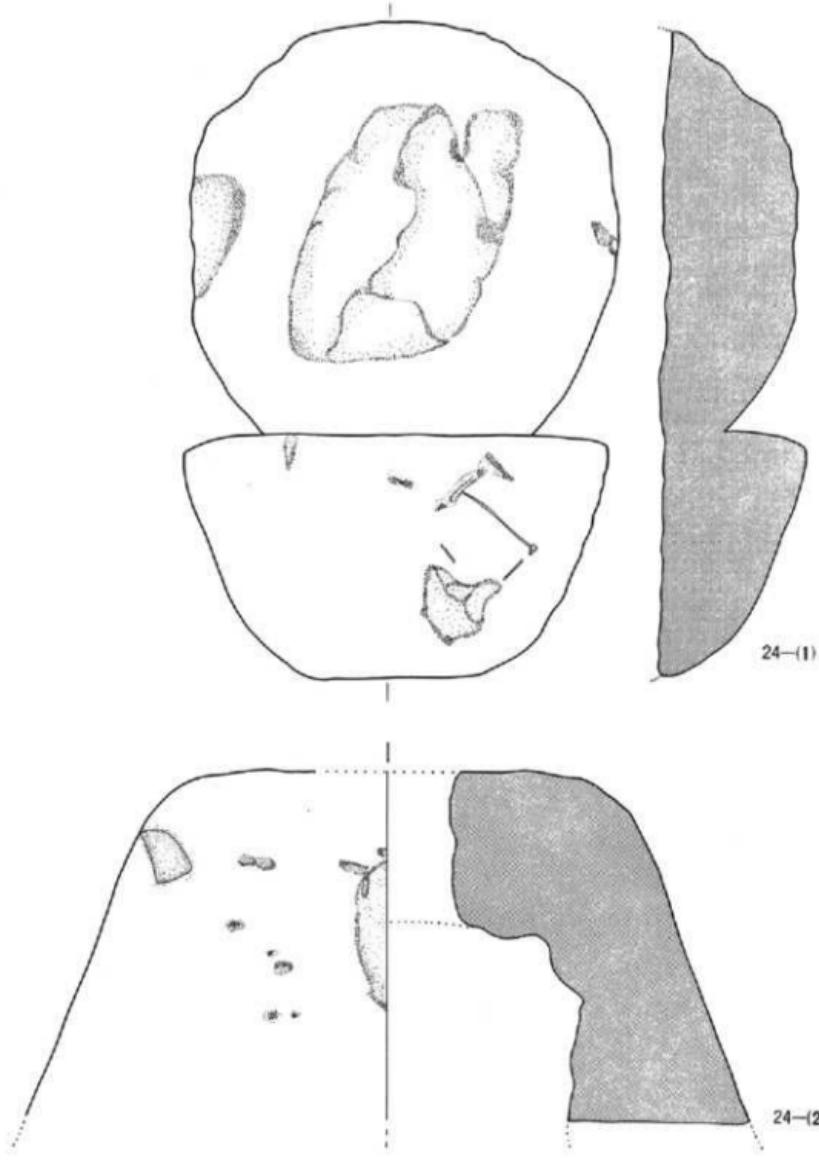
遺物番号	器種	計測値(%)		色調	胎土	焼成	底部切歯	調査技法・調査者	出土地点 土層
		口径	底径						
16	須恵器	高台付环		暗灰色	緻密	良	ハラ切	付高台 内面剥落をロクロ痕	SH1-F1
17			(68)	灰色	緻密	良	回糸	内面剥落をロクロ痕	SH1-F1
18			(132)	灰色	緻密	良	回糸	内面剥落をロクロ痕	SH1-F1
19			(70)	灰色	緻密	良	付高台	内面剥落をロクロ痕	SH1-F1
20	須恵器	裏		灰色	砂粒混	良		外面条縦状アケ病 内面青銅斑文	SH1-F1
21				暗灰色	緻密・粗砂混	良		外面条縦状アケ病 内面条縦状アケ病	SH1-F1
22				暗灰色	緻密	良		外面条縦状アケ病 内面アケ病	SH1-F1
(1)	鉄	鍔	残長24	厚さ3.5	幅5				SH1-F1
(2)			残長40.5	厚さ4	幅5				SH1-F1
(3)			残長33	厚さ5	幅5.5				SH1-F1
(4)			残長45	厚さ4	幅4.5				SH1-F1
(5)			残長20	厚さ3	幅4.5	四面体			SH1-F1
(6)			残長53	厚さ4.5	幅4	四面体 頂部			SH1-F1
(7)			残長35.5	厚さ5.5	幅4.5	四面体 頂部			SH1-F1
23(8)	銅	釘	残長25	厚さ5	幅4.5	四面体			SH1-F1
(9)			残長32	厚さ5	幅6	四面体 頂部			SH1-F1
00			残長30	厚さ3.5	幅4	四面体			SH1-F1
01			残長22	厚さ5	幅5	四面体			SH1-F1
02			残長31	厚さ2.5	幅4	四面体			SH1-F1
03			残長43	厚さ8.5	幅5	四面体			SH1-F1
04			残長32	厚さ2.5	幅3	四面体			SH1-F1
05			残長67.5	厚さ3.5	幅4.5	四面体			SH1-F1
24(1)	石製品	五輪塔	高さ335	空・履輪部					SH1-F1
(2)			高さ180	口径	7.6	火輪部			SH1-F1

墓壙の北寄り埋土1～2層から、五輪塔の空・風輪が半裁されたもの（第21図24-1）と火輪の一部と思われるもの（24-2）が各1点と、その他、輪の場所が不明な塔片が数点出土している。梵字等の彫り込みは認められない。材質は石英粗面岩である。

五輪塔が日本石塔の主流となったのは平安時代後期以降であり、記銘のある最古の例は岩手県西磐井郡平泉町駿院墓地の仁安4年（1169）塔である。五輪塔の宝珠や火輪の笠の部分などに時代的な変化があるとされるが、本墓壙出土の空風輪や火輪の形態は鎌倉時代的な様式を示す。

また庄内地方を中心として発見されている火葬墳墓の分類（註1）では、室町時代から江戸時代初期にかけてのものは、前代に比べて墳丘が小規模で、墳頂に痕跡的に川原石を積み上げることが多いとされている。藏骨器は特別認められず、木棺あるいは土壙に埋葬したらしい。本墓壙の形態は、盛土は確認できなかったが、藏骨器がなく下部に木棺の存在が予測されるなどこれに共通する点が多い。したがって本墓壙の時期は、墓壙内から多く出土している平安時代の土器は決め手にならず、五輪塔および墓壙の形態を元に鎌倉～室町時代頃と把えておきたい。ただし県内では五輪塔個々の正確な実測図を基にした形態の変遷はまだなされておらず、今後の課題である。

註1 川崎利夫「辺境地における古墳の終末と火葬墓の展開」山形県の考古と歴史 1967年



第21図 SHI墓壙出土五輪塔

4. 土壌出土の遺物（第22図、表3、図版20）

今回の調査で検出された土壌10基のうち、北区のSK 5・46・47・50土壌を除く6基の土壌から遺物が出土している。このうちとくに遺物の出土が多かったのは南区のSK28・29・31・61土壌である。つぎに主な土壌の遺物と推定時期について述べる。

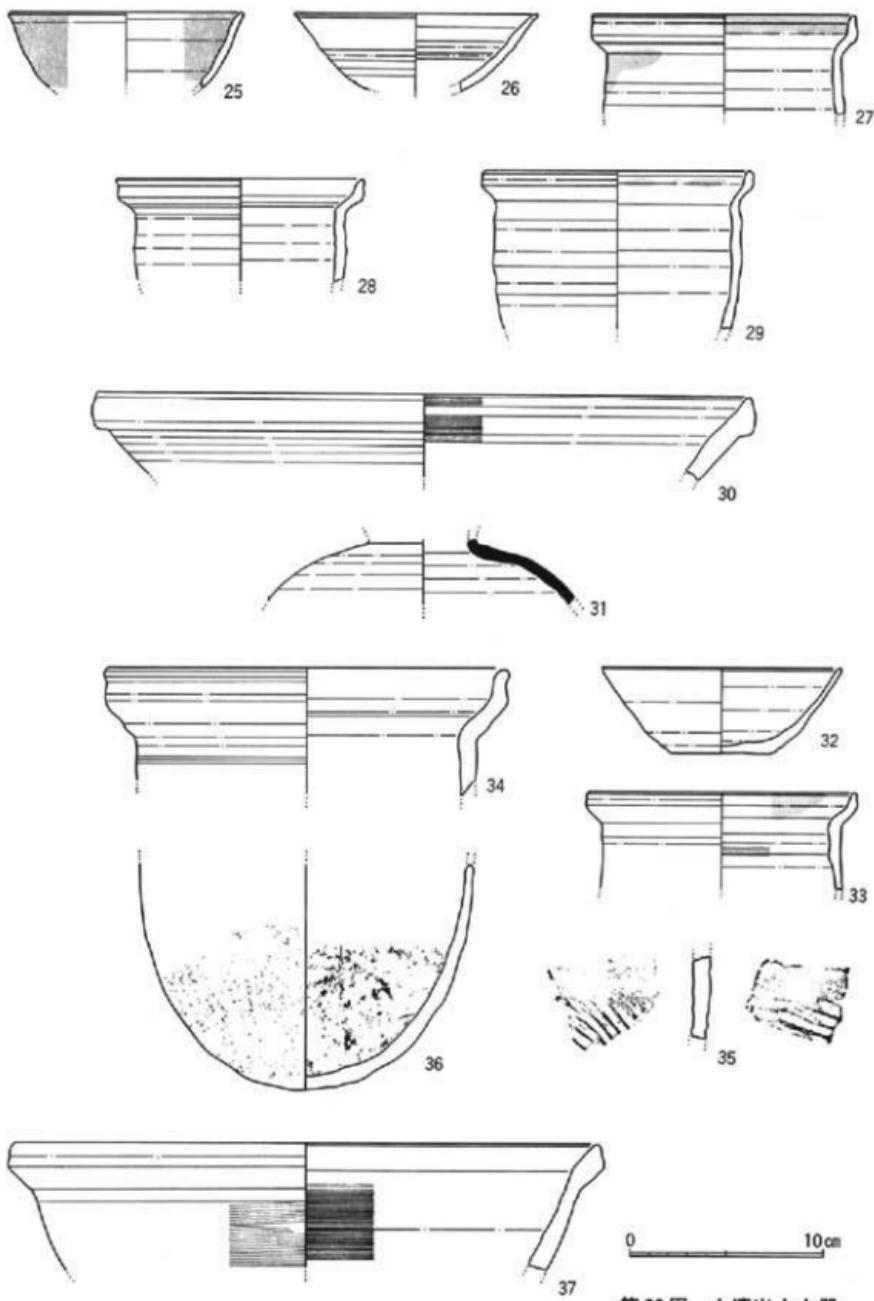
SK28土壤とSK29号土壤は重複しており、断面の上層観察からみて、SK29号土壤がSK28土壤を切って掘り込んでいる。SK28土壤からは内外面が黒色化処理されている土師器壺(第22図25)・赤焼土器壺(同図26)・同小形甕(27~29)・同甕・同壺(30)など計88片の土器が出土している。またSK29土壤からは内面が黒色化処理されている土師器壺・同小形甕・須恵器壺(第22図31)・赤焼土器壺(32)・同小形甕(33)・同甕(34・35)・同壺(37)など計168片の土器が出土している。時期は、両者とも赤焼土器小形甕ないし甕形土器の口縁部が丸く膨みをもつことや、SK29土壤覆土2層出土の内黒土師器壺に軽い高台をもつことなどから、SK29土壤は平安時代10世紀末葉、SK28土壤は10世紀後半頃に比定される。

SK31土壤の覆土1層からは、赤焼土器壺・同小形甕・同甌（第22図36）など計23片の土器が出土している。覆土2層からは遺物の出土は認められなかった。いずれも小片で、口縁部の形態が判るものがないため時期の限定は困難であり、大きく10～11世紀代と概括しておきたい。

北区の6基の土壙のうちSK45・50・53の三つの土壙から遺物が出土している。SK53土壙から須恵器杯と赤焼土器甕の細片が各1点づつ出土しているものの、SK50・53土壙からはビニール製の袋片、SK45土壙からはスレート質の土管が出土しており、時期は明治以降の新しいものと考えられる。遺物の出土はなかつたが、覆土からみてSK5・46土壙も最近の時期と思われる。ただしSK47土壙は、覆土に炭化粒子が混るなど竪穴住居跡の覆土に共通することから、時期は平安時代にあたる可能性が強い。

表3 土塘出土土器觀察表

遺物 番号	器 種	計測値(%)		色	調 合	土	焼成 度	底部 切面	調整 技 法	備 考	出土 地 点 土 層
		口径	底径								
25	土師器 環	(121)	38	黒	色	良		内外面ミガキ 黒色化		SK28-F4	
26		(125)		赤褐色	鐵	砂	良		内面顯著なロクロ痕	SK28-F1	
27	赤 燒 土 器 甕	136		赤褐色	石	英	砂		口縁部内外面焼付着 外面わずかに焼付着	SK28-F1	
28		(128)		赤褐色	鐵	鐵	砂	良		SK28-F4	
29	燒 土 器 甕	136		褐	色		良		口縁部内部に焼付着	SK28-F1	
30		(352)		赤褐色	鐵	砂	混	良	口縁部に明瞭なロクロ痕 内面ハケ目	SK28-F4	
31	須恵器 壺			灰	色	鐵	密	良	内部が顯著なロクロ痕	SK29-F3	
32	赤 燒 土 器 甕	(52)		灰褐色	鐵	砂	混	良	回共	SK29-F3	
33		(138)		赤褐色	石	英	砂	良	口縁部内外面焼付着	SK29-F3	
34	(210)			赤褐色	鐵	砂	混	良		SK29-F3	
35				赤褐色	石	英	砂	良	外表面線状叩き 内面角線状アザ痕	SK29-F3	
36	燒 土 器 甕	116		赤褐色	鐵	砂	混	良	外表面線状叩き	SK31-F1	
37		(302)		鐵		密	良		内外面ハケ目	SK29-F2	



第22図 土壙出土土器

5. SK61土壤出土の土器 (第23図～28図、表4・5、図版21～26)

SK61土壤は、長径330cm、短径185cm、遺構検出面から壙底の最深部までの深さ43cmを測る不整椭円形の掘り込みである。埋土は3層に分れ、各層ともほぼ水平な堆積状況を呈する。このうち土壤中央部の埋土1層および埋土2層から土器が集中的に出土している。総破片数が321点を数え、層位毎の内訳は埋土1層が286点、埋土2層が30点、埋土3層が2点となる。ただし埋土2・3層からはかなり大きめの破片や1個体になるものが多く出土している。これらは出土状態からみて比較的短期間の所産と思われるため、本遺構の土器群について新たに節を設けて検討を加えてみる。

SK61土壤から出土した土器は、黒色土器・須恵器・赤焼土器の三つに大別できる。黒色土器は、内面ないし外外面にヘラミガキのち黒色化処理が施されている土師器の一種である。本土器群には壺以外に、刷毛目調整を施した甕などの所謂「土師器」の器種が認められないため、便宜上「黒色土器」の名称を用いる。

須恵器は、ロクロ調整ののき構築的な窯を使って還元炎焼成されているものである。器種としては壺・壺・甕などがある。

赤焼土器は、ロクロや叩きによる整形など技術的に須恵器の技法を用いながら、意図的に酸化炎焼成を行っているものである。器種としては壺・小形甕・甕・堀・羽釜などがあり、器形も所謂「土師器」とは異った内容を有する。

321点のうち総破片数による黒色土器・須恵器・赤焼土器の百分比率は、それぞれ1.6%（5片）・2.5%（7片）・95.9%（308片）となるが、個体識別が可能な土器による百分比率は6.7%（3点）・13.3%（6点）・80.0%（36点）となり、後者の方が実個体数の比率に近そうである。つぎに、3大別の各器種毎に内容をみてみる。

黒色土器は壺が3点出土している（第23図38）。すべて内容がヘラミガキのち黒色化処理されているもので、外面に黒斑現象が認められる。体部片のみで底部がないため、高台の有無や底部の切り離し技法などについては不明である。

須恵器は、壺が2点（第23図39・40）、壺が3点（同図41～43）、甕が1点（同図44）出土している。39は高台の付く壺で、底部の切り離しはヘラ切りによる。40は口径や器高に比して底径の小さい壺で、底部の切り離しは回転糸切りによる。41は壺の口縁部で、口唇部端が強く外反する。42は高台が付く壺の底部と思われるもので、底部の切り離しはヘラ切りによる。43は壺の体部下半で、外面に自然釉が付着している。44は大形甕の体部片で、外面に条線状の叩き目、内面には条線状のアテ痕と青海波文が併用されている。

赤焼土器は、壺が7点（第24図45～51）、小形甕が9点（同図52～59）、甕が15点（第25図60～63・第26図64～68・第27図69～74）、羽釜が1点（第27図76）、堀が4点（第28図77～80）

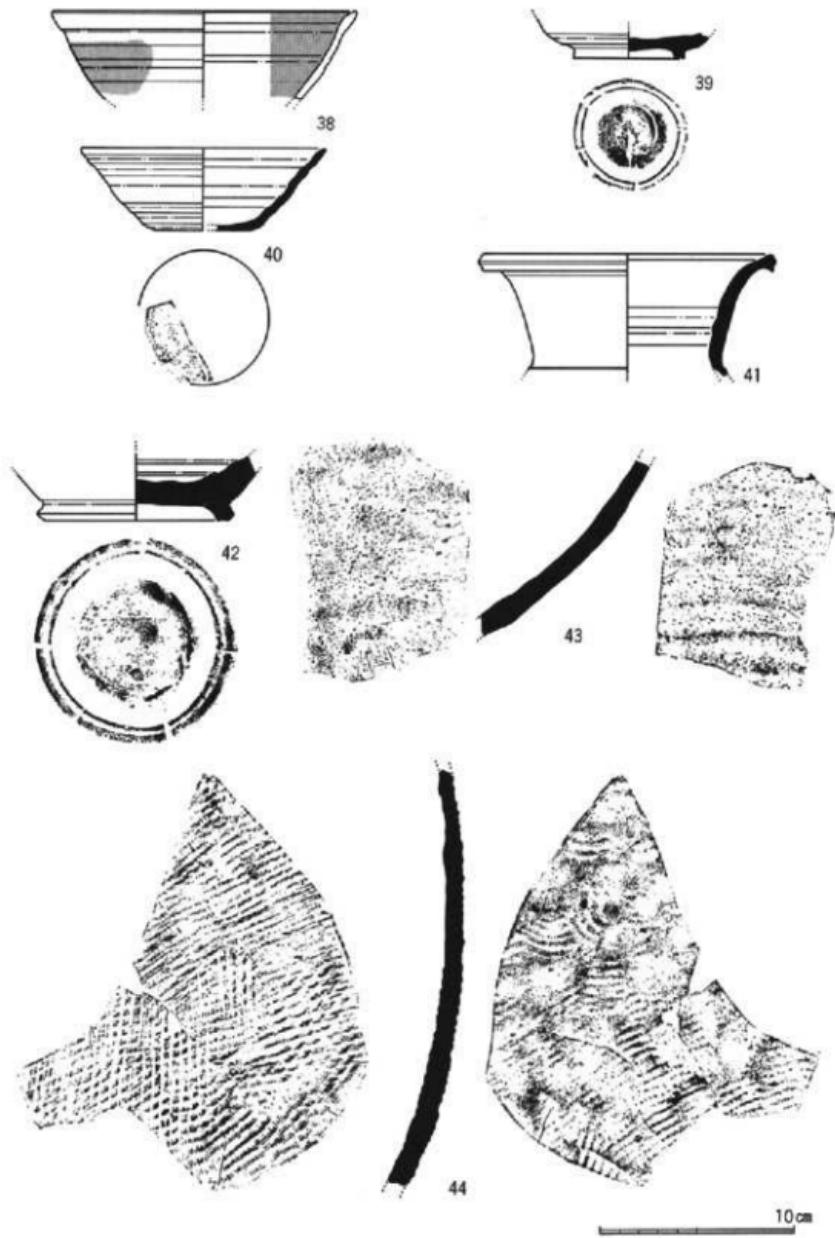
表4 SK61土壌出土器観察表

遺物番号	形 横	計測値 (%)		色 調	胎 土	焼成	底 部 切離	調 整 技 法・備考	出土地点層位
		口 径	底 壁						
38	環	(158)		明灰色	粗 砂 蕩	良	△△切 △△切	外縁ヘラミガキ 諸著なクロ痕 内面突出部有	SK61-F1
39	環			58	明灰 色	粗 砂 蕡	良	内面自然崩材有	SK61-F2
40	環	(128)	(65)	43	白灰 色	粗 砂 蕡	良	内面自然崩材有	SK61-F3
41	環	(150)		73	暗灰 色	粗 砂 蕡	良	口縁部諸著なクロ痕	SK61-F2
42	壺			182	暗灰 色	砂 粒 蕡	中や良	ハ テ 切 鉢高台 外面削り跡	SK61-F1
43	壺			73	暗灰 色	砂 粒 蕡	中や良	外縁自然崩材有	SK61-F3
44	壺			212	灰 色	粗 砂 蕡	良	外縁各部剥離 内面突出部有 青海文有	SK61-F1
45	环	(104)		45	赤 黄 色	粗 砂 泥	良	内外縁諸著なクロ痕	SK61-F1
46	环	(120)	(50)	51	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	内面自然崩材有	SK61-F1
47	环	(124)	48	48	赤 黄 色	砂 粒 蕡	中や良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1
48	环	(134)	54	50	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1
49	环	(146)	60	56	赤 黄 色	砂 粒 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1
50	环			52	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1
51	高台付环			78	赤 黄 色	石英 砂	良	赤 高台付	SK61-F1
52	环	(133)	689	74	白	粗 砂 蕡	良	口縁部外縁削材 有	SK61-F1
53	环	(37-80)		赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1	
54	环	(150)		赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1	
55	环	(144)	815	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F2	
56	环	(144)		赤 黄 色	石英 砂	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1	
57	环	(132)		赤 黄 色	磨擦 細部磨	良	口縁部に磨擦なクロ痕	SK61-F1	
58	环	(156)	39	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1	
59	环	(140)		赤 黄 色	磨擦 細部磨	良	外縁諸著なクロ痕	SK61-F1	
60	环	(240)	(9.2)	赤灰 黄色	石英 砂	良		SK61-I	
61	环	(236)	(4.4)	74	白	粗 砂 蕡	良		SK61-I
62	环	(224)	(6.4)	74	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良		SK61-I
63	环	(240)	330	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁一部磨材有 内面刷毛有	SK61-I	
64	环	(247)	(14.3)	74	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良		SK61-II
65	环	(240)	(11.2)	74	明 暗 色	石英 砂	良		SK61-II-1
66	环	(200)	(10)	74	赤 黄 色	石英 砂	良		SK61-I
67	环	(238)	(8.4)	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良		SK61-I	
68	环	(248)	(5.8)	磨擦+石質化	赤 黄 色	良			SK61-II
69	环			磨擦+石質化	石英 砂	良	外縁各部刷毛有	SK61-F1	
70	环				赤 黄 色	磨擦 細部磨	良	外縁各部刷毛有	SK61-F1
71	环			74	赤 黄 色	石英 砂	良	外縁各部刷毛有 敷本のハケ目 内面ハケ目	SK61-F1
72	环			74	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁各部刷毛有 内面各部抹アテ痕	SK61-F1
73	器			赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁各部刷毛有 内面各部抹アテ痕	SK61-F1	
74	器	(60)	(66)	74	赤 黄 色	粗 砂 蕡	良	外縁各部刷毛有 内面ハケ目 三ヶ所に沿る痕	SK61-F3
75	製陶土器	344	22.6	24.3	明 暗 赤褐色	粗 砂 蕡	良		SK61-F1
76	羽 瓶			(4.1)	赤 南 色	粗 砂 蕡	良		

出土している。もっとも量が多く、本土壌出土の土器群の主体を占める。

环は口径や器高に比して底径の小さいもので、口径は120~146%を測る。底部の切り離しはすべて回転糸切りによるもので、内外面ともヘラミガキやヘラ削りなどの再調整は認められない。51は底部に高台が付く环で、この種の环は本例1点のみである。

小形の壺は、口径が140%、器高が130%前後を測るもので、器厚も後述する中形の壺形土器に比して薄い。口縁部から体部上半にかけてのものがほとんどで、底部が残っているものは少ないが、52は底部の切り離しが回転糸切りによる。内外面ともロクロ整形痕が明瞭に残っている。刷毛目やヘラミガキなどの再調整は認められない。口縁部は丸く膨み



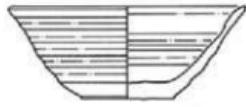
第23図 SK61土壤出土土器（1）



45



46



47



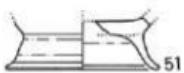
48



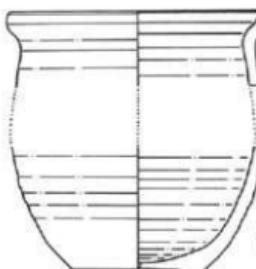
49



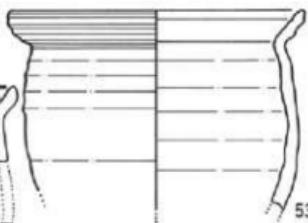
50



51



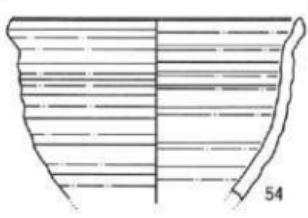
52



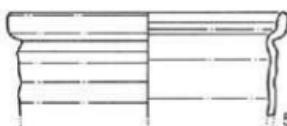
53



55



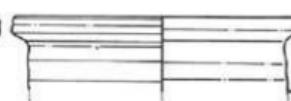
54



56



57



58



59

0 10cm

第24図 SK61土壤出土土器（2）

をもつのが特徴であるが、52～54のようにより口唇部が肥厚し外反するものもある。

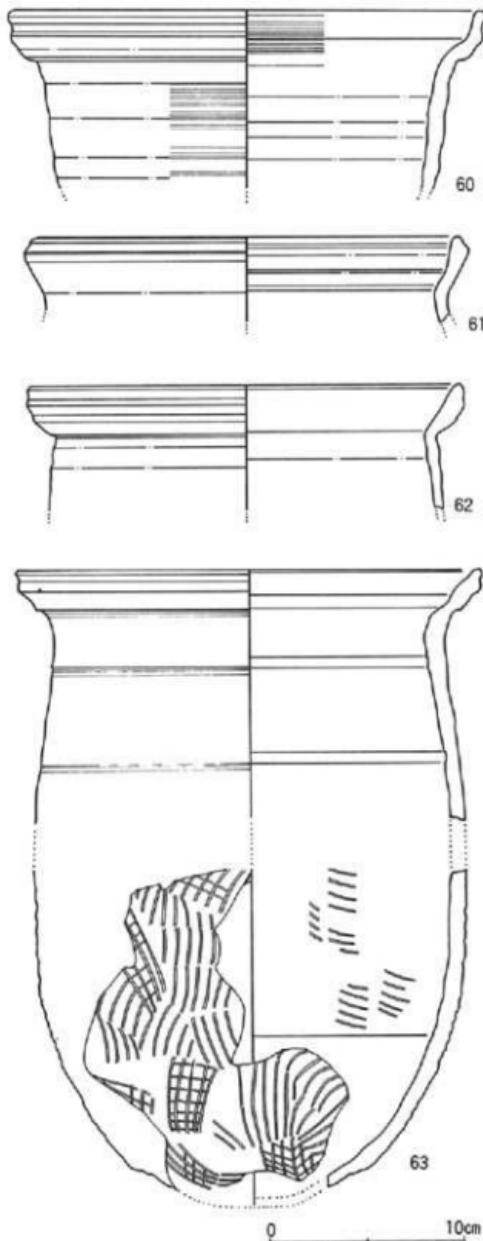
長胴の甕は、口径が240%、器高が330%前後を測るもので器厚も約8%と厚い。口縁部から体部上半にかけてのものがほとんどで、底部が残っているものは少ない。底部の形状は丸底のもの(63・71)と平底のもの(74)の二つがある。74の底部は置造りによるものと思われる。

体部上半は内外面ともロクロ整形痕が顕著で、体部下半から底部にかけては内外面に条線状の叩き目ないしてアテ痕が施されている。口縁部は、丸く膨みをもって立上り口唇部外面に一条の窪みをもつもの(60・65・66・68)と、「く」の字状に外反し口唇部が肥厚するもの(62・67)およびその中間形(61・63・64)がある。

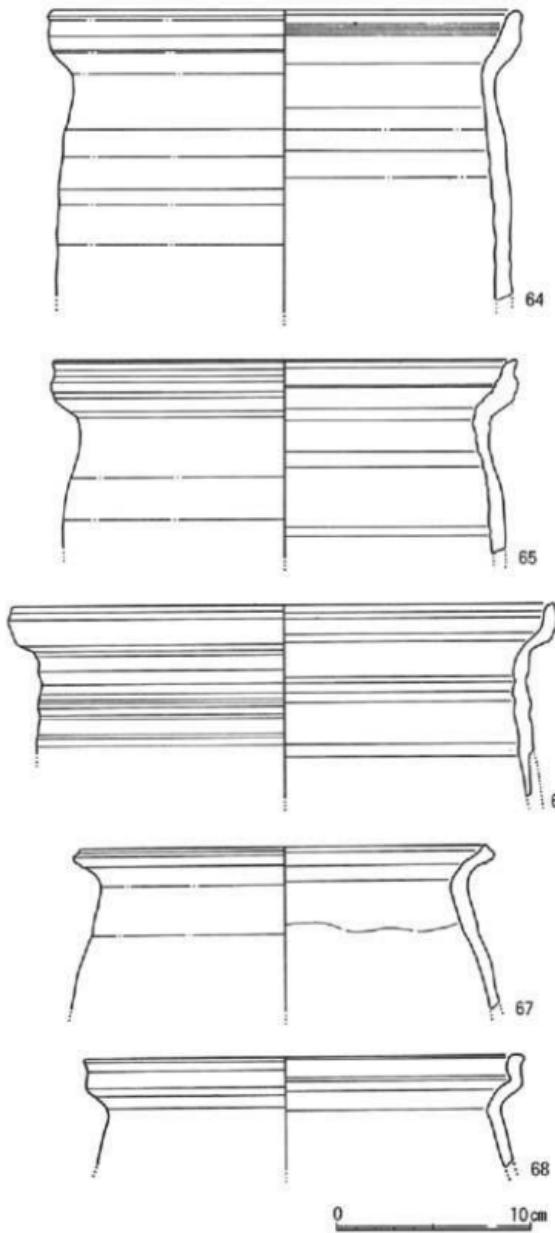
羽釜は、口縁部片1点(76)のみの出土であるが、庄内地方では類例が少なく貴重である。

壺は、口径が360～430%を測るもので、口縁部から体部上半にかけてのものだけである。内外面ともロクロ整形痕が顕著で、一部ナデ調整が施されるものもある。

口縁部は、甕と同じように丸く膨みをもって立上り外面に一条の窪みをもつもの(80)と、「く」の字に外反し口唇部が肥厚するもの(77・79)



第25図 SK61土壤出土土器(3)



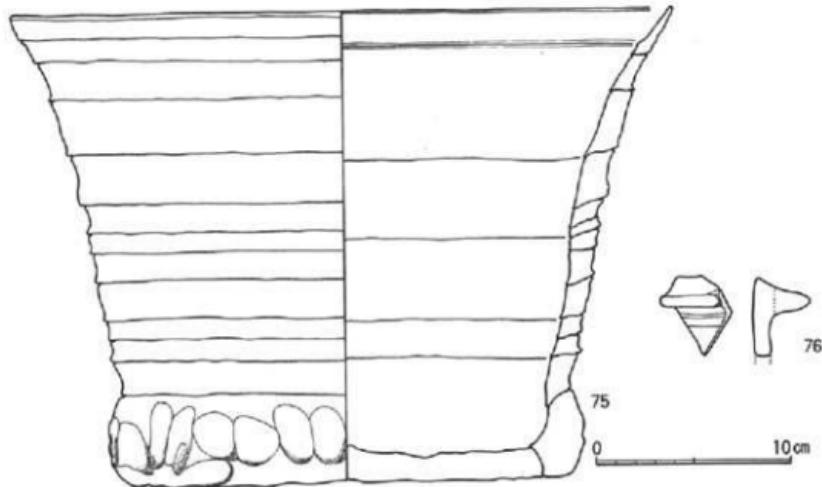
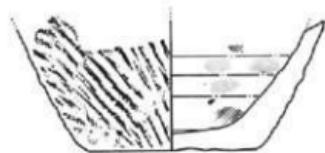
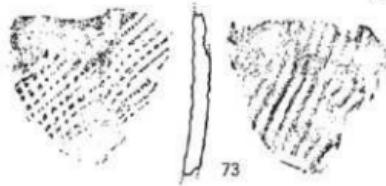
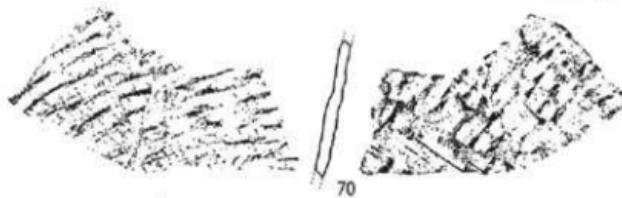
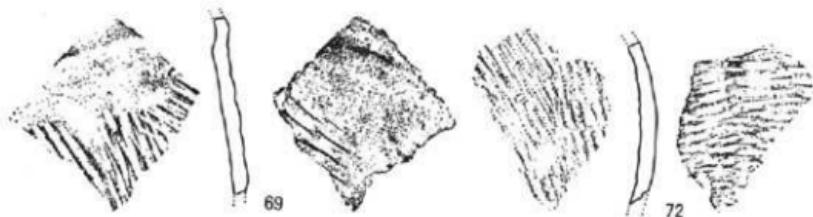
およびその中間形(78)がある。

第27図75は、SK61土壤埋土1層から出土した製塙土器である。器壁には輪積み痕が明瞭に残り、やや張り出した底部近くの外面には連続した指ナデによる調整が施されている。

つぎに、これらSK61土壤出土の土器群の時期についてみてみる。さきに私共は、庄内地方における平安時代の土器の編年について、7期に分けた試案(註1)を提示したが、その第V期ないし第IV期の土器群に類似する。その中でも赤焼土器环における高台の出現や同窯に放射状叩き(70)があるところから、第IV期とした八幡町後田遺跡SK602土壤の土器群に共通点が多い。したがって時期は11世紀前半頃に比定できる。

註1 安部 実「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983年

第26図 SK61土壤出土土器 (4)



第27図 SK61土壤出土土器(5)

6. 溝状遺構出土の土器（第28図81～84、表5、図版26）

今回の調査で検出された溝状遺構22条のうち、8条の溝状遺構から遺物が出土している。これらの遺物の総破片数は71点を数え、赤焼土器が55点と大半を占め、ついで須恵器7点・内黒土師器4点・陶磁器3点・木製品1点となる。このうどくに遺物の出土が多かったのは北区のSD33・51・54溝状遺構、南区のSD68溝状遺構、トレンチ内のSD32溝状遺構などである。つぎに、主な溝状遺構の遺物と推定時期について述べる。

SD32溝状遺構は、南区の北方18mのトレンチ内で検出された幅50cm、長さ2.5m、深さ10cm前後の東西に長い溝跡で、埋土1層から須恵器壺(第28図82)、赤焼土器壺・同甕、木片が出土している。すべて細片で時期は10～11世紀と概括するしかない。SD30溝状遺構は、南区北端から北に10m延びる幅30cm、深さ5cm前後の溝跡で、赤焼土器壺と同甕が4片出土している。これも時期は10～11世紀と概括するしかない。

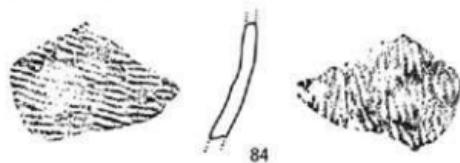
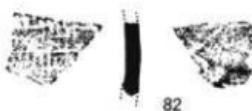
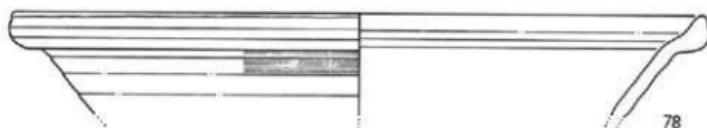
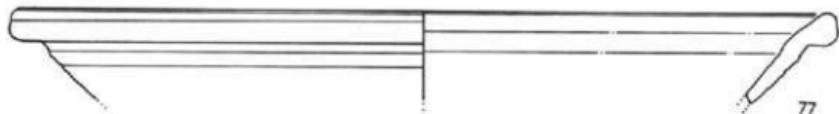
SD33～35・37溝状遺構は北区中央東寄りをほぼ南北に走る溝跡で、SD33・34溝状遺構埋土1層から赤焼土器の壺と甕の細片が計14片出土している。時期は10～11世紀である。北区北東隅にあるSD41・42・44・49溝状遺構のうち、SD41溝跡埋土1層から赤焼土器小形甕と近世以降の陶器が各1点出土している。時期は近世以降と推定される。

SD51・52・54溝状遺構は北区北西部をほぼ東西に走る溝跡で、各遺構の埋土1層から遺物がやまとまって出土している。SD51溝状遺構からは内黒土師器壺・須恵器壺・同甕(81)・同甕、赤焼土器壺・同甕、SD52溝状遺構からは赤焼土器小形甕、SD54溝状遺構からは赤焼土器小形甕(83)・同甕(84)が出土している。時期は10世紀中葉から11世紀前半にかけての頃と推定される。

SD68溝状遺構は南区南西隅をほぼ南北に走る溝跡で、埋土1層から内黒土師器壺、赤焼土器壺・同小形甕・同甕が出土している。時期は10～11世紀である。南区からはこのほかSD62・78・79・91・92溝状遺構などが検出されているが、いずれも遺物の出土がなく時期は不明である。

表5 SK61土壤・溝状遺構出土土器観察表

遺物 番号	器 種	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	底部 切離	調整技法・備考	出土地点・層位
		口径	底径	厚高						
77	赤焼土器	(430)	(45)	辛褐色	石英細砂混	良				SK61-F2
78										
79										
80										
81	須恵器	蓋	(112)	(1.9)	暗灰色	緻密	良			SD51-F1
82										
83	赤焼土器	甕			赤褐色	粗砂混	良			SD54-F1
84										



0 10cm

第28図 SK61土壤出土土器(6)・満状造構出土土器

7. 包含層出土の土器（第29・30図、表6、図版27・28）

包含層出土の遺物についても触れるべき資料が多い。とくに注目すべき遺物について、若干の記述を行う。

第29図85～87は、北区北西部の第Ⅱ層から出土した遺物のうち図化し得たものを掲げた。85は内面がヘラミガキのうち黒色化処理されている平底の土師器壺で、底部の切り離しは不明である。この種の壺は本遺跡の場合全体の器形がわかるものが少ない。86はほぼ完形の須恵器蓋で、口径に比して器高が著しく低いものである。天井部側縁に墨痕が連続して認められる。89は多孔式の底部をもつ瓶の一部で、色調は暗赤褐色を呈する。底部片だけなので全体の器形や調整のあり方などはわからないが、おそらく赤焼土器の範疇に入るものと思われる。

第29図88～91と第30図93は、北区の中央を斜めに横切る現農道の下面から出土した須恵器類である。千河原遺跡で遺構が検出された場所は開田工事などによってほとんど削平を受けており、幸うじて農道の下面に当時の包含層ないし工事の際に集められた遺物が残っている状態である。88は高台が付く須恵器壺で、底部の切り離しはハラ切りによる。89～91は須恵器蓋の体部片で、89の内面および90と91の外面上には格子状の叩き目、89の外面上および90の内面上には条線状の叩き目、91の内面上には青海波文が施されている。第30図93は陶器の壺底部と思われるもので、内外面に鉛釉が塗られている。時期は中世以降とみられるが、詳細は不明である。

58年9月のは場整備工事中に、南精査区の南東100mの地点から赤焼土器壺2個体（第30図95・96）・壺1個体（同図92）がまとまって発見された。知らせを聞いて調査員が現地に行なった時は遺物のみが取り上げられて、遺構はほとんど破壊されてしまった後であったが、発見者の話と僅かに残っている遺構の状態を総合するとつぎのようになる。

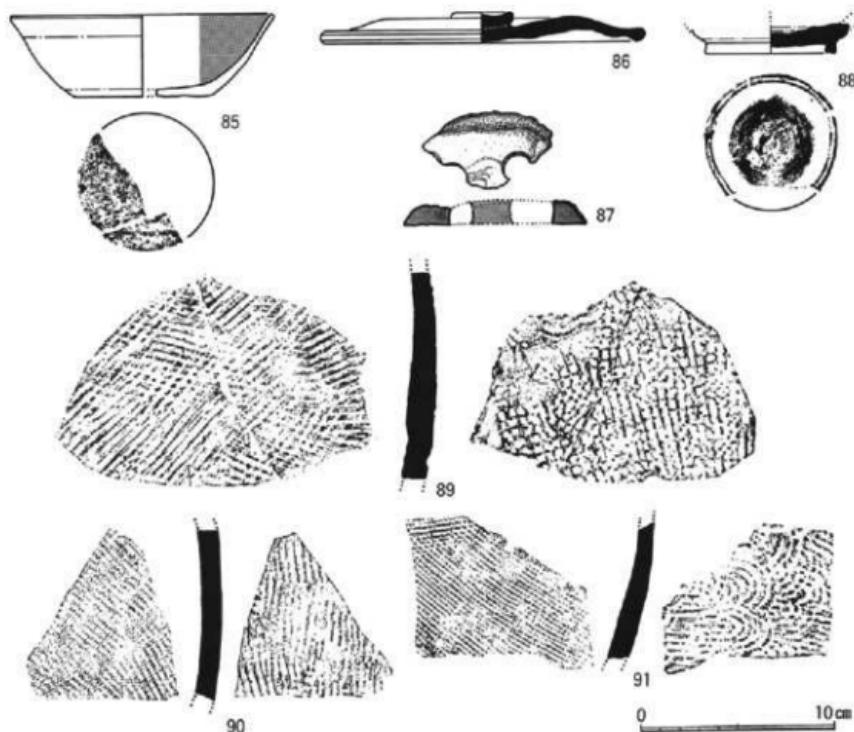
表6 包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	計測値(%)		色調	胎土	焼成	底切	部類	調整技法・備考	出土地点層位
		口径	底径							
85	内黒土器 壺			赤褐色	石英砂混	良	不	用	内面黒色化	26-28・II
86	須恵器 蓋	(168)		明灰褐色	鐵密	良			明瞭なクロ窓	26-28・II
87	赤燒土器 壺			赤褐色	鐵密	良			多孔式の底部	31-22・II
88	壺	68		明灰褐色	鐵密	良	ハラ	おこし痕		X-0
89	須 深			暗灰褐色	砂粒混	良			外表面條状叩き 自然縫付着 内面格子状アテ痕	
90	器			暗灰褐色	鐵密	良			外表面格子状叩き 内面条縫状アテ痕	
91	器			灰褐色	鐵密	良			外表面格子状叩き 内面青海波文アテ痕	
92	赤燒土器 壺	(134)	54	(4.2)	褐色	鐵密	良	回	米	X-0
93	陶 器		?	(1.1)	暗褐色	鐵密	良		内外面に鉛釉	
94	大型 壺	245	(320)	褐色	鐵砂混	良				
95	赤燒土器 壺	238	355	褐色	石英砂混	良				
96	壺	(460)	(6)	明赤褐色	鐵砂混	良				

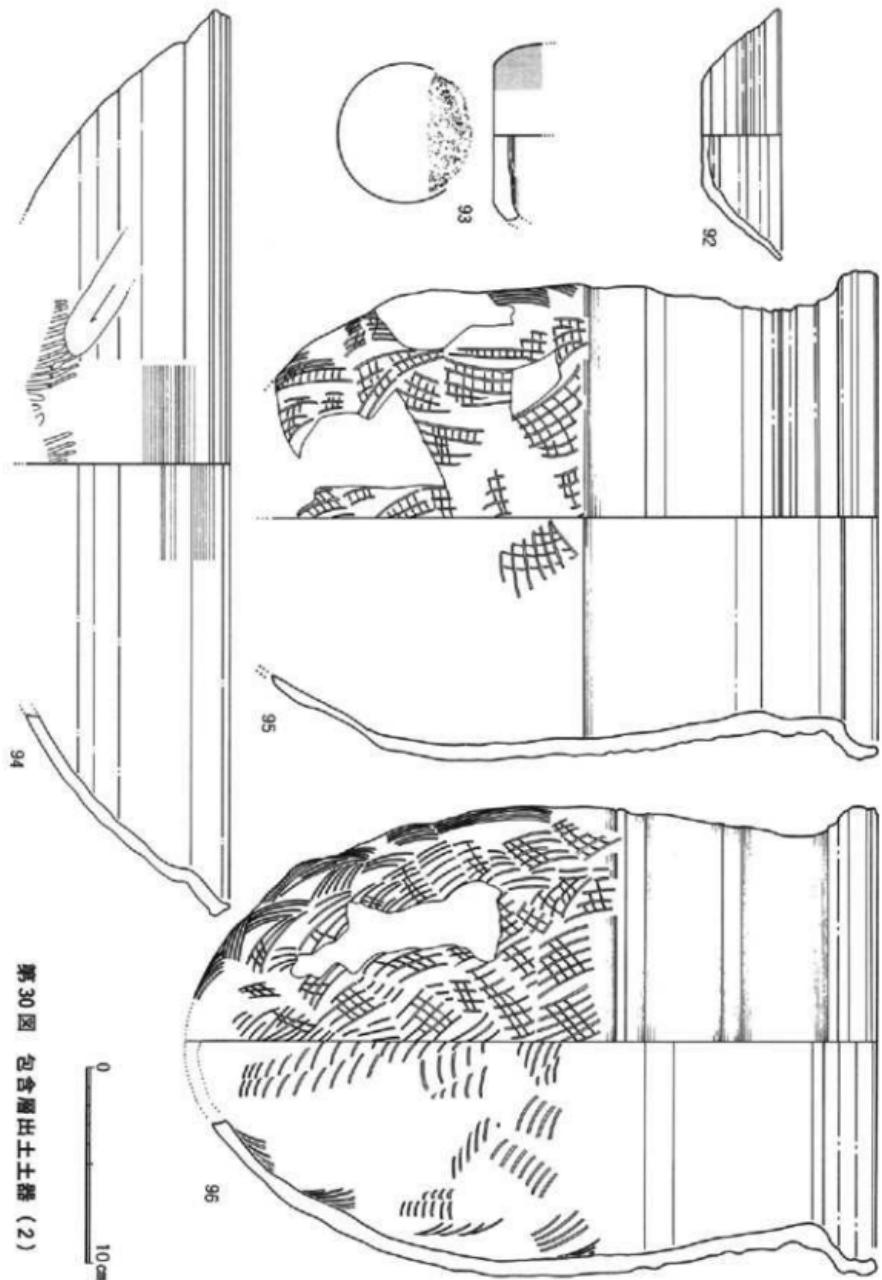
「長径約120cm、短径約60cm、深さ30cm前後の長楕円形の土壙があり、その中に2個体の赤焼土器長胴甕が中央部で口を合せて横位に配置されていた。位置は96の長胴甕が北側、95の長胴甕が南側にあった。92の赤焼土器环や94の鍋もこの中から一緒に出たものであるが、詳しい場所はわからない。埋土は炭化物を含む褐色の粘質土である……。」

これらのことからみて、本造構は合口甕棺状を有する土壙墓であった可能性が強いと思われる。ただし骨片等は確認出来なかった。95・96の赤焼土器長胴甕は、いずれも丸底を呈し、口縁部が丸く膨みをもって立ち上る。体部下半の外面には条線状の叩き目、内面には同心円ないし条線状のアテ痕を有する。時期は、92の赤焼土器と94の同鍋も含めてSK 61土壙の土器群に類似することから、平安時代11世紀前半頃と推定される。平安時代の合口甕棺を用いた墓壙は、青森県や岩手県に類例がある(註1)が本県では初例である。

註1 斎藤尚己・沼山源喜治「東北地方の合口甕棺造構について」北奥古代文化第6号 1978年



第29図 包含層出土土器 (1)



第30図 包含層出土土器（2）

V. まとめ

1. 造構の時期と変遷

本遺跡の調査で検出された造構には、竪穴住居跡9棟・掘立柱建物跡3棟・墓壙1基・土壙9基・溝状造構22条などがある。検出地域からみると、竪穴住居跡は北区に、掘立柱建物跡は南区に集中して分布する。またこれらの造構は、出土遺物や埋土および造構の重複関係から四つの時期に大別できる。

第Ⅰ期は、平安時代10世紀中葉頃のもので、北区のST2・8・10・12住居跡がこれにあたる。掘立柱建物跡や土壙・溝状造構などで、明らかに本時期にあたると推定できるものは検出されていない。ST6・9・11住居跡の時期も10世紀代としかわからないが、第Ⅰ期に属する可能性が強い。またST3・4住居跡も、北区の竪穴住居跡のほとんどが第Ⅰ期に属することを考慮すれば、これまた同時期の可能性がある。

北区の9棟の竪穴住居跡は、主軸の向きからみれば、ほぼ真東を示すST2・3・4住居跡のグループと、ほぼ北西を示すST6・8・9・11・12住居跡のグループとの二群に分けられるが、土器の型式上からこれらの時期差を識別することは困難である。ただし、ST6住居跡とST12住居跡の重複関係にみられるように、当然これらの住居跡群にも若干の時期差があることは考慮しなければならない。

第Ⅱ期は、平安時代10世紀後葉頃のもので、南区のSB15建物跡、SK28・29土壙などがこれにあたる。SB13建物跡も、出土土器や建物の向きなどからみて本時期に属する可能性が強い。

第Ⅲ期は、平安時代11世紀前半頃のもので、南区のSK61土壙、発掘区外で発見された楕円形の土壙墓などがこれにあたる。南区のSB14建物跡は柱穴からの遺物の出土がなく時期を確定することは困難であるが、SB14建物跡の南面桁行線上にのる柱穴がSB13建物跡の柱穴EB107を切って掘り込まれていることから、SB13建物跡より時期が新しくなるものと推定される。SB14建物跡の向きと方位を同じくするものには、南区のSD30・32・68・78・79・91・92溝状造構などがあり、これらは時期がいずれも10~11世紀としか推定できなかったものであるが、第Ⅲ期の造構と把握してよさそうである。

第Ⅳ期は、鎌倉~室町時代の頃のもので、北区のSH1墓壙1基だけが本時期に属する。ただし中世陶器と思われる遺物も各地区から微量出土しており、他に造構が存在した可能性もある。このほか北区のSK45・46・50・53土壙、SD41・42・44・49溝状造構は、いずれも近世以降の新しい時期に属するものである。

千河原遺跡の遺構は、遺物の出土量が少ないので時期の確定が困難な点も多いが、一応4時期に分けた変遷を把握することができた。ここで注目されるのは、北区の竪穴住居跡群と南区の掘立柱建物跡群の関わりである。出土遺物等の検討からは、まず第Ⅰ期(10世紀中葉)に竪穴住居跡が出現し、つぎに第Ⅱ期(10世紀後葉)には掘立柱建物跡に変わり、掘立柱建物跡は第Ⅲ期(11世紀前半)にも引続くという結果を得ることができた。

庄内地方の平安時代における住居跡は、これまでの発掘調査による内容では掘立柱建物跡が主流を占め、竪穴住居跡が検出された例は極めて少ない。しかし今年度になって千河原遺跡や遊佐町吹浦遺跡などから竪穴住居跡がまとまって検出されており、掘立柱建物跡との関連について改めて検討すべき段階にきている。次節では、庄内地方の竪穴住居跡について考察を加えてみる。

2. 庄内地方の竪穴住居跡について

庄内地方で検出された竪穴住居跡は今年度(昭和58年)の検出例を入れて6遺跡・19棟確認されている(表7)。一遺跡で多くの例が検出された遺跡は、本遺跡の9棟と遊佐町吹浦遺跡の5棟である。この2つの遺跡で庄内地方検出例の7割以上を示し、竪穴住居跡集落の在り方など、検討を試みる好資料となる。この他には、立川町真木遺跡、羽黒町郷の浜C遺跡、鶴岡市上野山遺跡などが分布調査で竪穴住居跡の存在が確認されている。

竪穴住居跡を検出する遺跡には2つのタイプがある。一つは遺跡内に1~2棟の竪穴住居跡が存在するタイプで、遊佐町地正面遺跡、八幡町俵田遺跡がこれに入る。もう一つは10棟前後で集落を営むタイプで吹浦遺跡や本遺跡がこれに入り、余目町上台遺跡もこれに含まれると思われる。上台遺跡は竪穴住居跡が1棟検出されただけであるが、調査された地区が台地縁辺部に通る新設道路内であったことで、その他の地域にも同様な住居跡が多数存在することが伺える。

地正面遺跡と俵田遺跡は平野部に存在し、遺構は掘立柱建物跡を主とする集落跡内にあり、竪穴住居跡は集落における何らかの施設としてその存在があったものと考えられる。そして両遺跡を除けば、多くの遺跡は眼下に低地を見おろす台地上に立地する。顕著な検出例として吹浦遺跡と本遺跡がある。吹浦遺跡は、標高6~16mの台地上に立地し、南方に突出した緩やかな傾斜面に5棟の竪穴住居跡が検出されている。標高12m前後には平面形が一辺2.8mを呈した方形に整った4棟の住居跡、12~13mには一辺5~6mの長方形ないし方形を呈したやや大型の住居跡が分布し、二群に分かれる(註1)。千河原遺跡では、9棟の竪穴住居跡が検出され、主軸方向などで2つの群に分けられる。

竪穴住居跡は、縄文時代から営なまってきた普遍的な住形態である。各時代によってそ

の様相は違つてはいるが、古墳時代から奈良・平安時代にかけては方形ないし長方形を呈し、4本の柱で形作り、炉からカマドへと変つてゆく。吹浦遺跡では一辺約3mのやや小さな住居跡と一辺約5mの大型の住居跡が存在し、各々にカマドを壁におき、一部では煙道も確認されている。千河原遺跡では一辺3m前後の住居と一辺4m前後の住居が確認され、カマドは住居跡コーナーにおいている。煙道は水田・畠地耕作が深く確認されなかつたが、本来は設置していたものと考えられる。

竪穴住居跡の在り方について2つのタイプに分けたが、その時期は先に述べた倭田・地正面遺跡が9世紀代に、その他は10世紀から11世紀代に相当する。そして竪穴住居跡は掘立柱建物跡と共に存し、その両者の間に時期的な先後関係は今のところ認めることができない。従来庄内地方における平安時代の住形態は、山形県の内陸部等とは異なり、掘立柱建物跡が主流を占めると考えられてきたが、これについて再検討の必要が生じてきたといえる。

庄内地方の平安時代の住形態が遺跡によって掘立柱建物跡を主とする集落跡と、竪穴住居跡を主とする集落跡に分けられることについてはいくつかの要因が考えられる。

一つは立地的条件である。庄内地方の地形的概観の中で掘立柱建物跡を主とする集落が立地する標高10m前後の庄内河間低地は、強グライ層で水位の高い土地である。このような地形上には竪穴住居跡を営む事は不適であり、竪穴住居跡を主とする集落は、低地を見おろすことが出来る台地上や、平野部でも高所となる自然堤防上に立地する事にもよる。

さらにもう一つの要因は歴史的条件があげられる。平安時代、出羽国府として9世紀に入つて城輪柵跡が平野部に突如として造営され、その周辺に居住していた人々を律令制という大きな枠の中へ組み入れ、城輪柵跡を中心とする計画的な村落を配置した(註2)。城輪柵跡内の役所の建物を作り出す木材の供給が豊富だったことにより、配置された村落内の住形態が掘立柱建物跡を造る事を、容易に成しえたものと考えられる。この事については、近年来県教育委員会で実施している城輪柵跡周辺の遺跡調査で証明されており、特に10世紀代に入ると掘立柱建物跡を主とする集落跡が爆発的に増加する。また計画村落に組み込まれることが出来なかった最上川以南や日光川以北の地域でも立地条件に勝る掘立柱建物跡を主とした集落跡が営なまれたものと考えられ、一部には本遺跡のように両者が共存する遺跡も営なまれたものと考えられる。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の歴史的意味として、竪穴住居跡が台地上に立地することからこれらの人々は狩獵・漁獵民(山夷)、掘立柱建物跡が平地に立地することから農耕民(田夷)であると言われてはいるが(註3)、一概にはそうとも言えない。ただし、竪穴住居跡に伴う土器として刷毛目を施こされている土師器甕などが多く出土している傾向があり、今後検討を加える上で重要な問題となろう。

表7 庄内地方堅穴住居跡検出例一覧

番号	遺跡名	遺構名	所在地 市町村・大字・小字	平面形	規模(m) 東西×南北	床	支柱穴	間 隙	炉・カマド	時期	備 考	文 献
1	千 目 町・千 河 原・五 輪 地	ST2	余 目 町・千 河 原・五 輪 地	隅丸方形	3×3.2	良 好	—	—	—	10世紀中葉		
2		ST3		方 形	2.9×2.8	良 好	4	南邊に一部	中央部に炉	10世紀初期		
3		ST4		方 形 ?	—	やや良	—	—	—	10世紀	縦塗区内4分の1検出	
4		ST6		方 形	2.4×2.6	良 好	4	—	—	10世紀	ST12と重複	
5		ST8		やや長方形	4.4×3.6	良 好	4	北邊に一部	北西隅にカマド	10世紀中葉		
6		ST9		隅丸方形	3.4×3	良 好	4	—	—	10世紀		
7		ST10		—	—	やや良	—	—	南西隅にカマド	10世紀中葉	住跡跡3分の1検出	
8		ST11		長 方 形	4.3×3.5	やや良	—	—	西邊にカマド	10世紀	SX7と重複 (III) ST11→(IV) SX7 東京コーナーに跡塗六	
9		ST12		長 方 形	2.4×2.9	良 好	—	—	—	10世紀中葉	(III) ST6→ (IV) ST12	
10	上 台	ST2	余目町・廿六木・上台	隅丸方形	4.5×4.9	良 好	3	—	南東隅にカマド	10世紀後葉		1
11	岡 山	第4号	鶴岡市・舟岡・岡山	方 形	4.4×4.6	良 好	2	—	東邊にカマド	10世紀後葉	床面一面に炭化物散在 住跡跡東半部の検出	2
12	使 田	ST1	八幡町・岡島田・使田	隅丸方形	4.34×2.92	やや良	7	—	中央や北西に炉	9~10世紀		3
13	地正面 避往町	ST146	長 方 形	3.3×3.8	良 好	3	各邊に一部	—	—	9世紀末	ST147と重複 壁柱穴多数あり	4
14		ST147		隅丸方形	3.3×4	良 好	3	南邊に一部	—	9世紀後葉	(III) ST147→ (IV) ST146	4
15	吹 浦	ST1	道往町・吹浦・一本木 他	長 方 形	4.2×6	良	2	—	—	9世紀前半	範文時代造構と重複	5
16		ST4		方 形	3.1×3.3	良	3	—	南邊にカマド			5
17		ST5		方 形	2.6×2.8	良 好	4	—	中央に地炉	ST6と重複		5
18		ST6		方 形	2.6×2.9	良 好	4	—	中央に地炉	(III) ST6→ (IV) ST5		5
19		ST7		方 形	2.5×2.6	良 好	4	—	中央に地炉			5

註1 渋谷孝雄他「吹浦遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 1984年

註2 野尻 侃他「岡B遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1983年

註3 新野直吉「棚戸の意味」山形県史第1巻原始・古代・中世編第7章第2節3項 1982年

参考文献

- 文献1 名和達朗他「上台遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第14集 1978年
- 文献2 山形県教育委員会「岡山・山形県における原始住居跡と立石遺跡」1972年 遺構
- 文献3 佐藤庄一他 農林事業関係遺跡(2)「使田遺跡第1次」山形県埋蔵文化財調査報告書第64集 1983年
- 文献4 佐藤庄一他 農林事業関係遺跡「地正面遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第51集 1982年
- 文献5 渋谷孝雄他「吹浦遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 1984年

図 版

図版 1

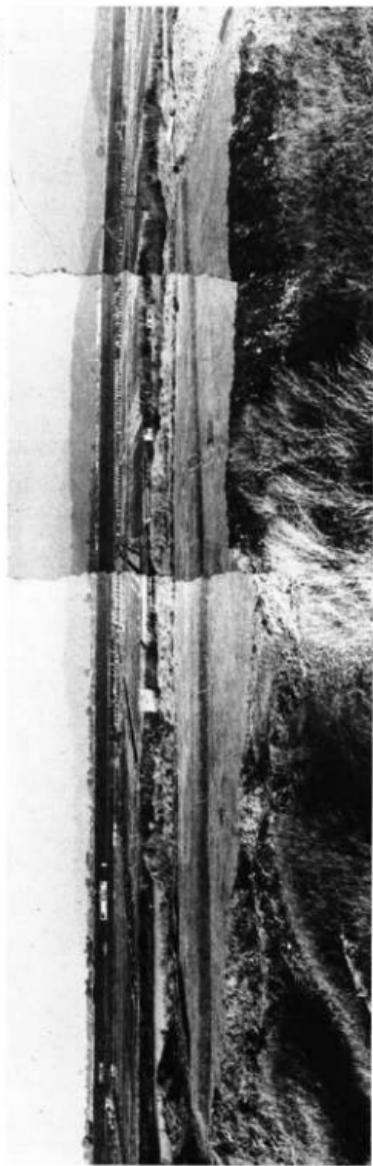


遺跡近景（南から）



北区全景（南から）

图版 2



北区遗物探出状况



南区遗物探出状况

図版 3



図版 4



ST 6 住居跡検出状況

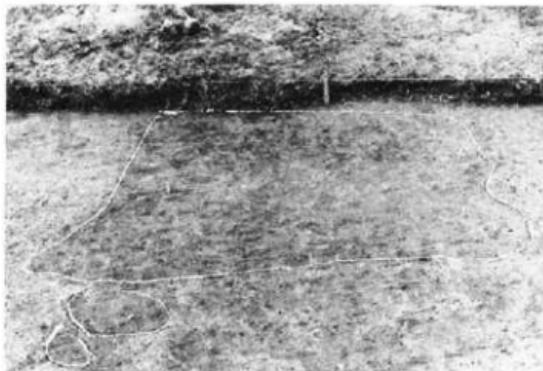


SX7 遺構・ST11 住居跡検出状況



ST 8 住居跡検出状況

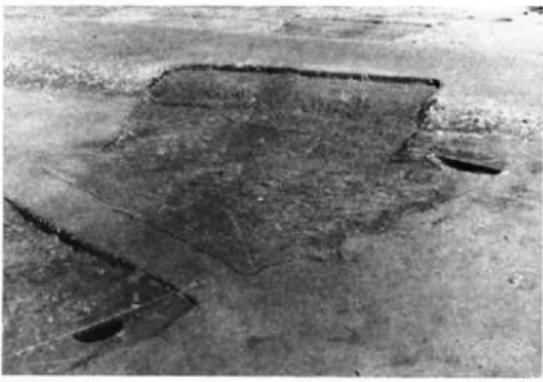
図版 5



ST9住居跡検出状況



ST10住居跡検出状況



ST11住居跡検出状況

図版 6



ST 2住居跡完掘



ST 3住居跡完掘



ST 6住居跡完掘

図版 7

ST6・ST12住居跡完掘



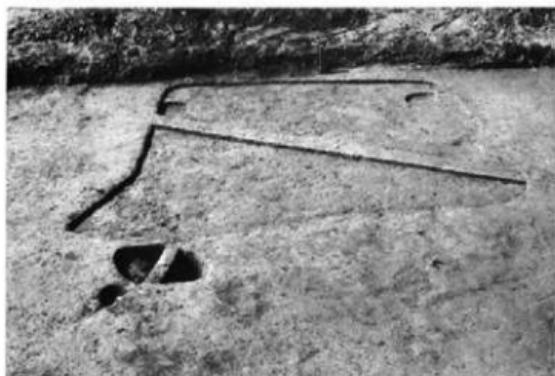
SX7遺構・ST11住居跡完掘



ST8住居跡完掘



図版 8



ST 9住居跡窓櫻



ST 8住居跡・EL 40炉跡

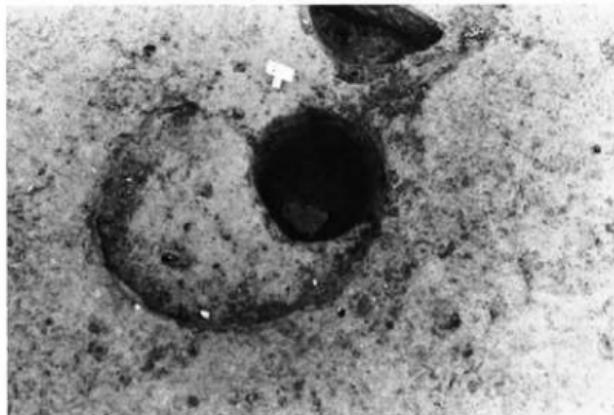


ST 10住居跡・EL 55炉跡

図版 9



SB13・14・15建物跡



EP 77柱穴土器出土状態

図版 10



SH1 墓塚検出状況



SH1 墓塚層序



SH1 墓塚下位平面



SH1墓壙 五輪塔出土狀態

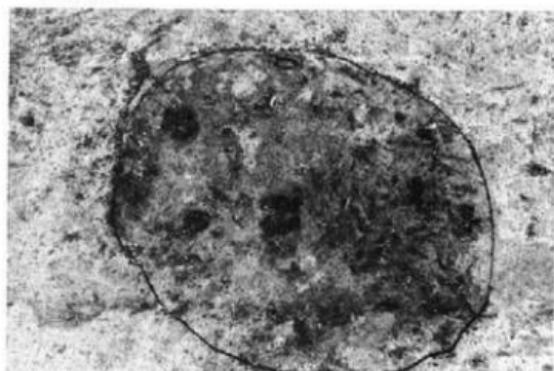


SH1墓壙 完掘

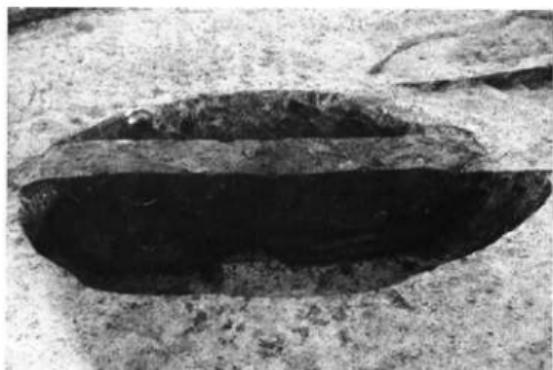


SH1墓壙 調查風景

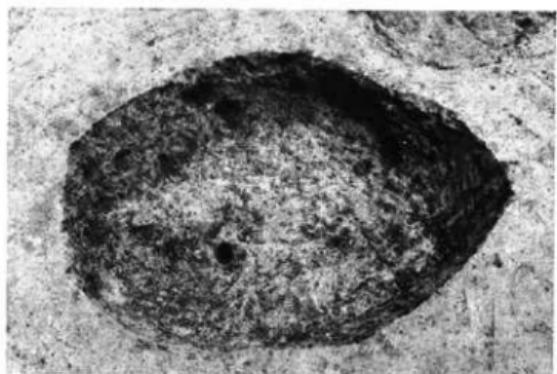
图 版 12



SK 29土壤检出状况



SK 29土壤层序



SK 29土壤完掘

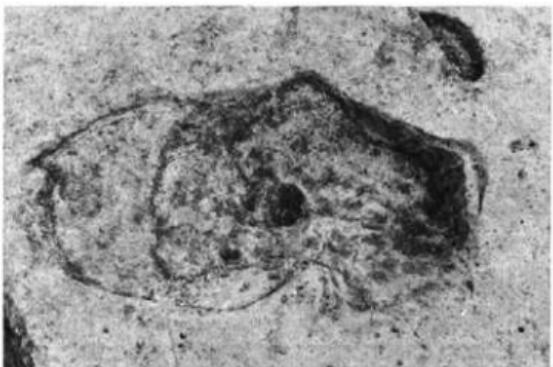
図版 13



SK 31土壤層序



SK 31土壤土器出土状況



SK 31土壤完掘

図版 14



SK61土壤層序



SK61土壤土器出土状況

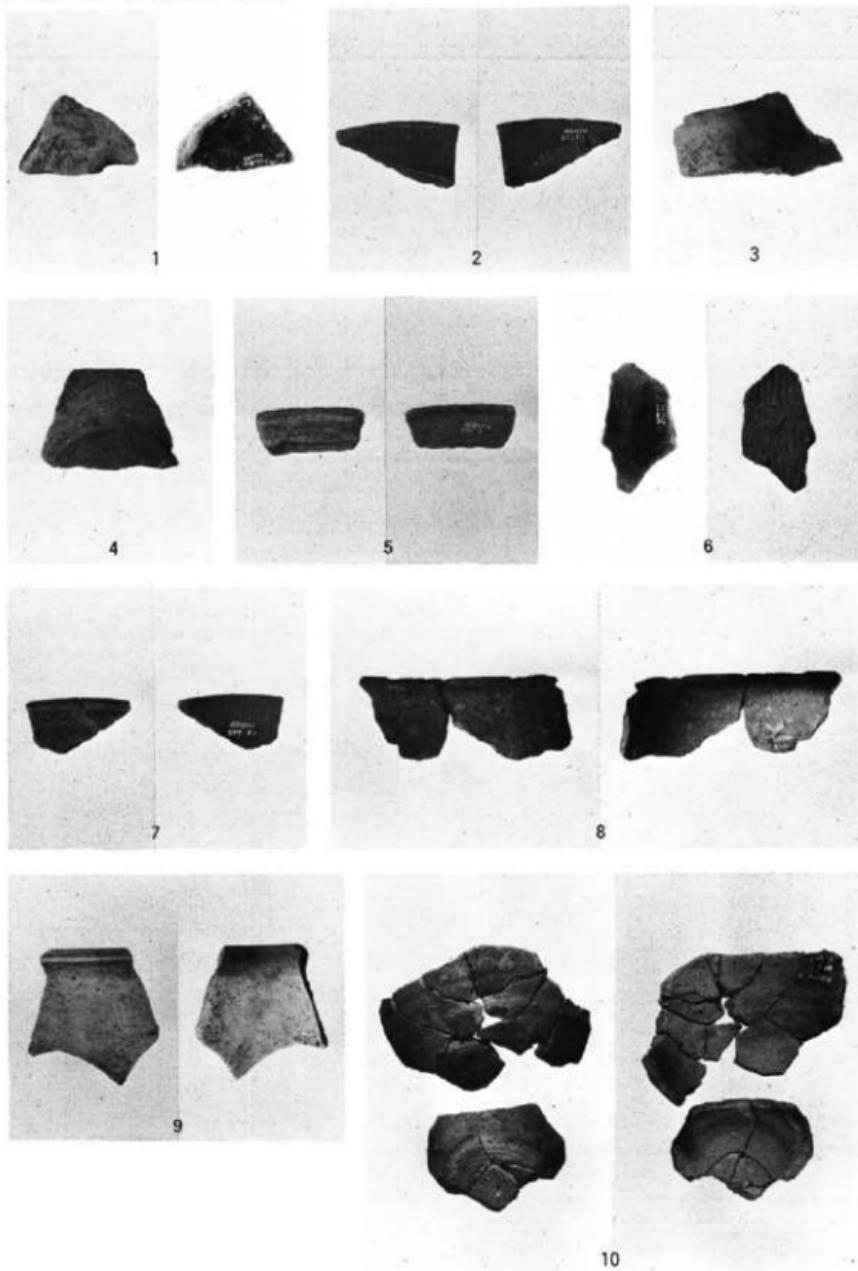


SK61土壤完掘



北区調査風景

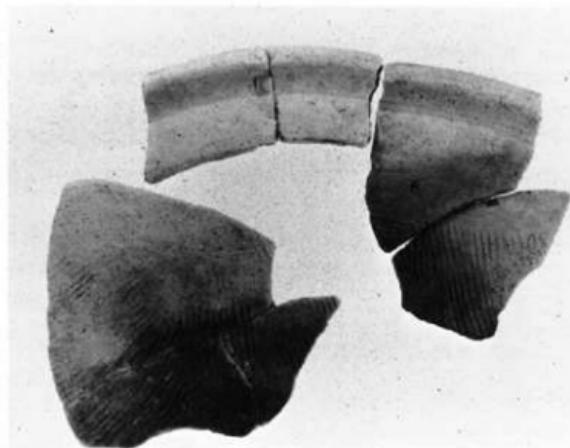
図版 16 住居跡出土土器 (1)



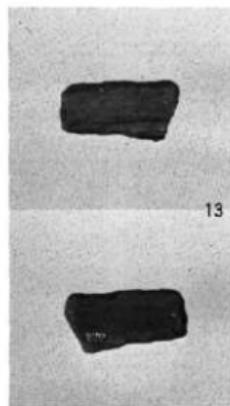
図版 17 住居跡出土土器 (2)



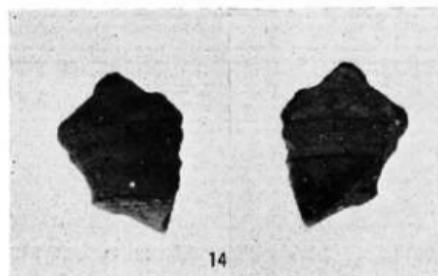
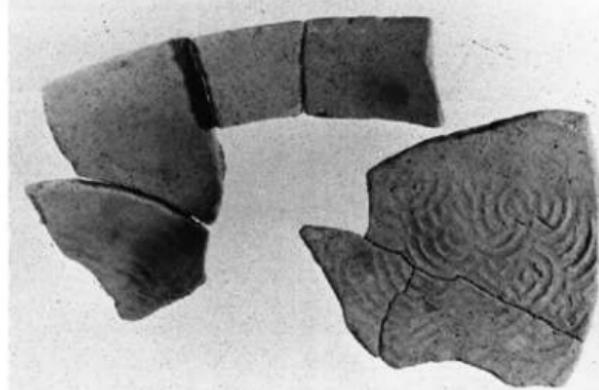
11



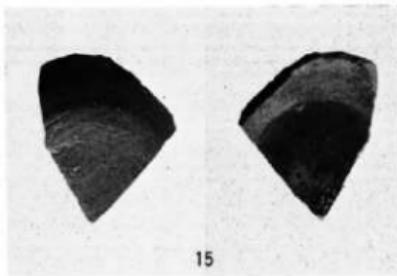
12



13



14



15

図版 18 SHI墓出土遺物

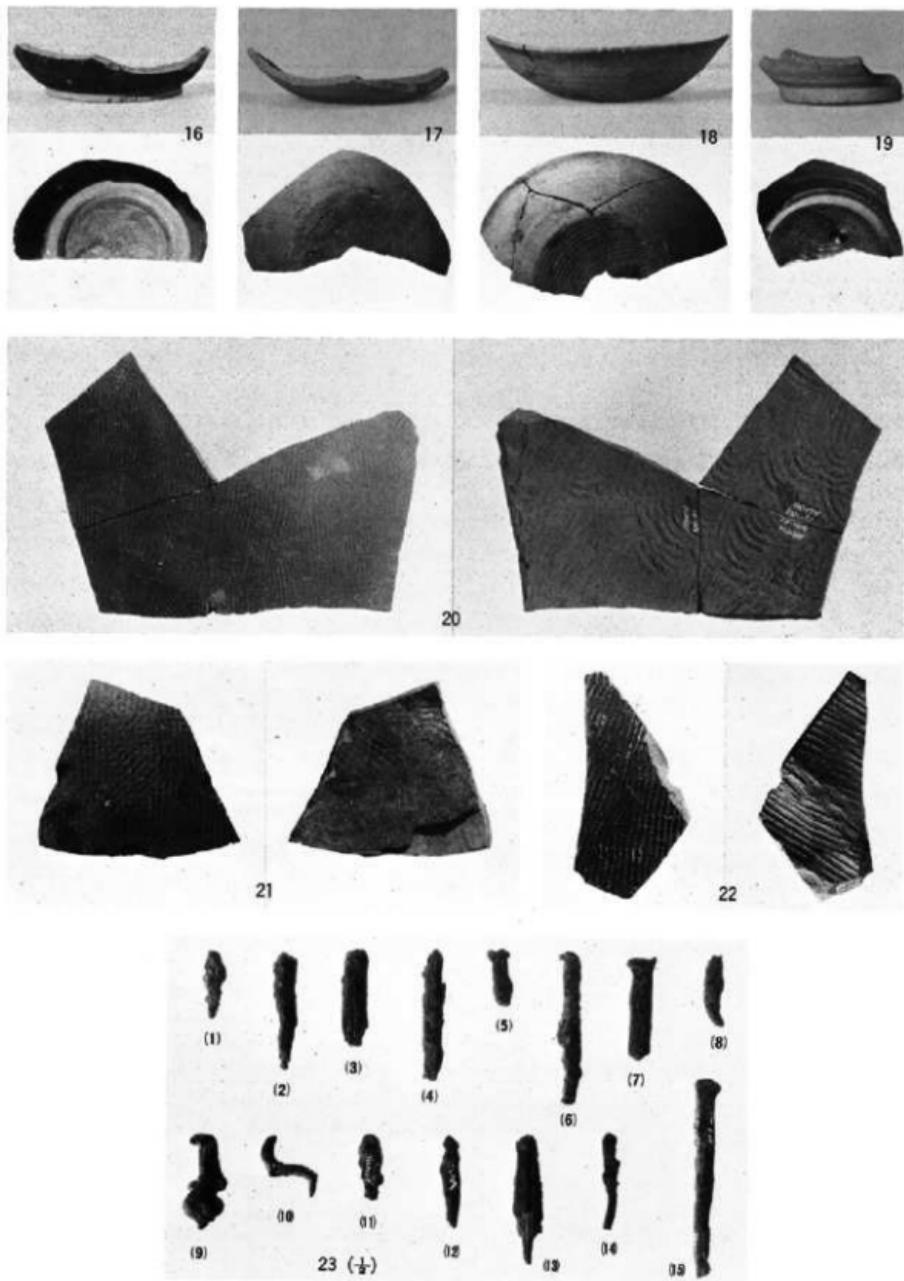


圖 版 19 SHI基壇出土五輪塔

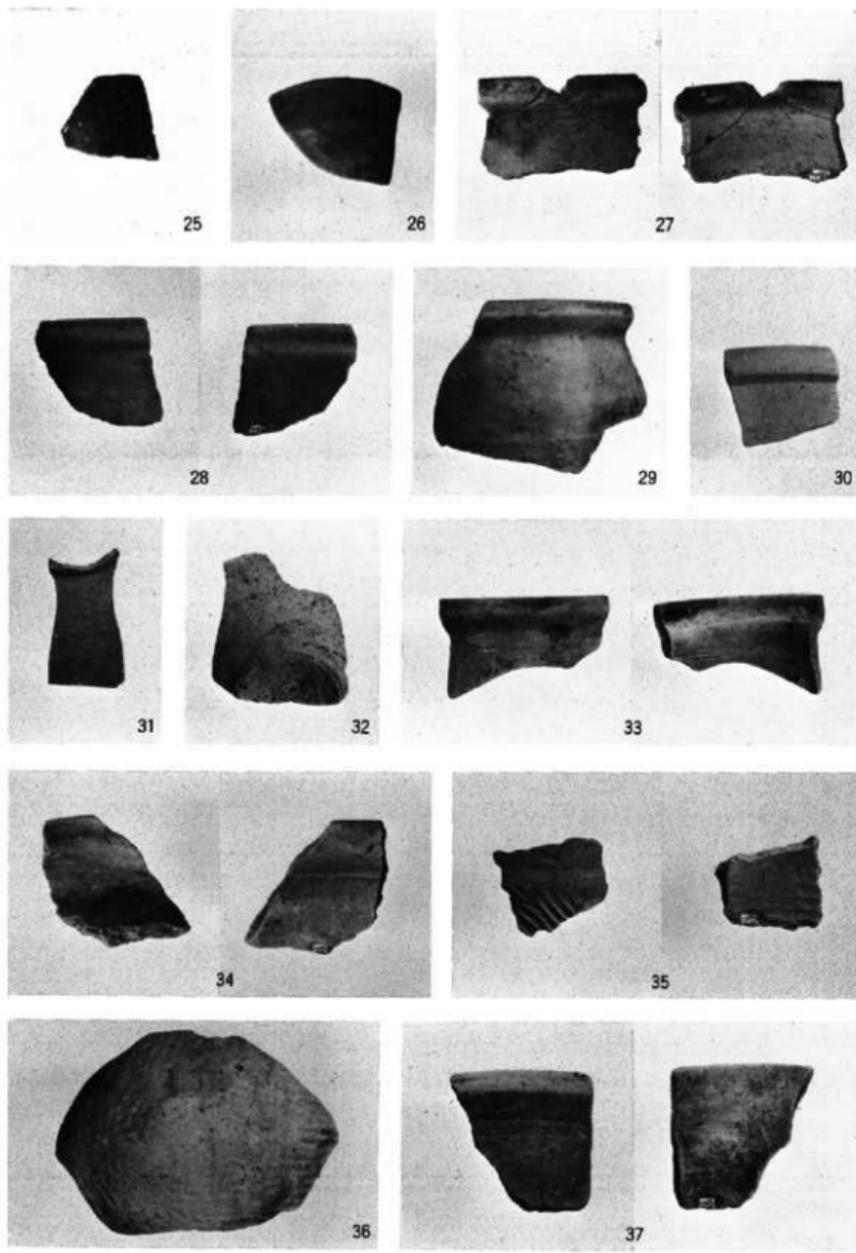


24-(1)

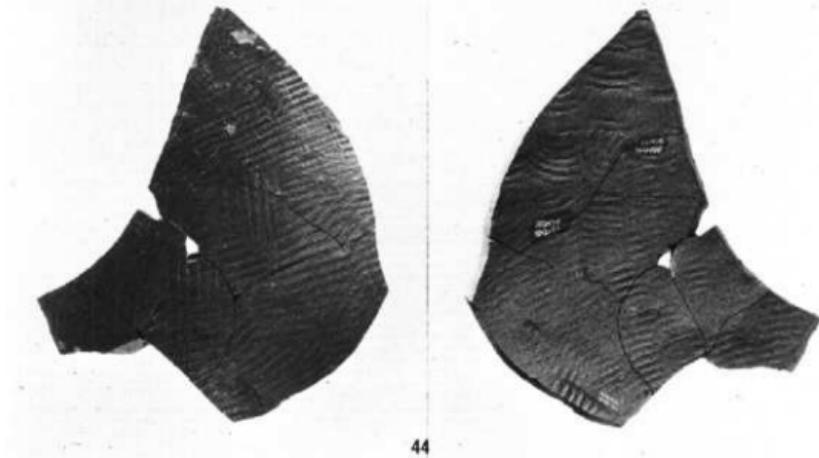
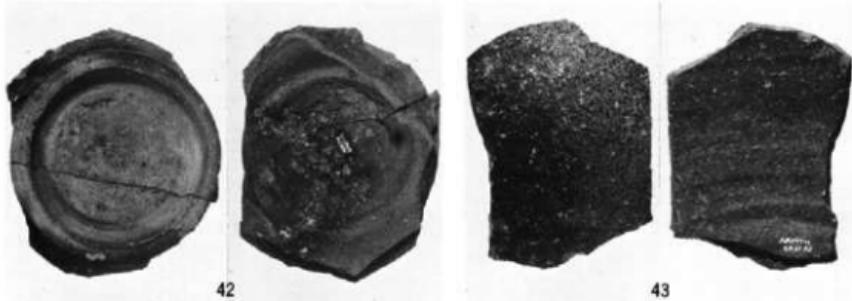
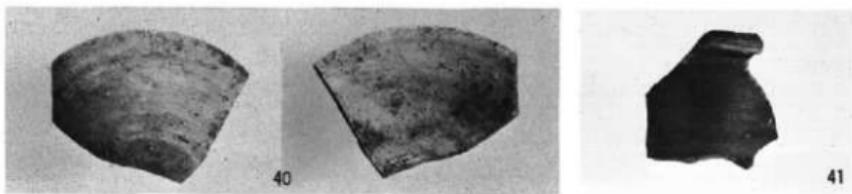


24-(2)

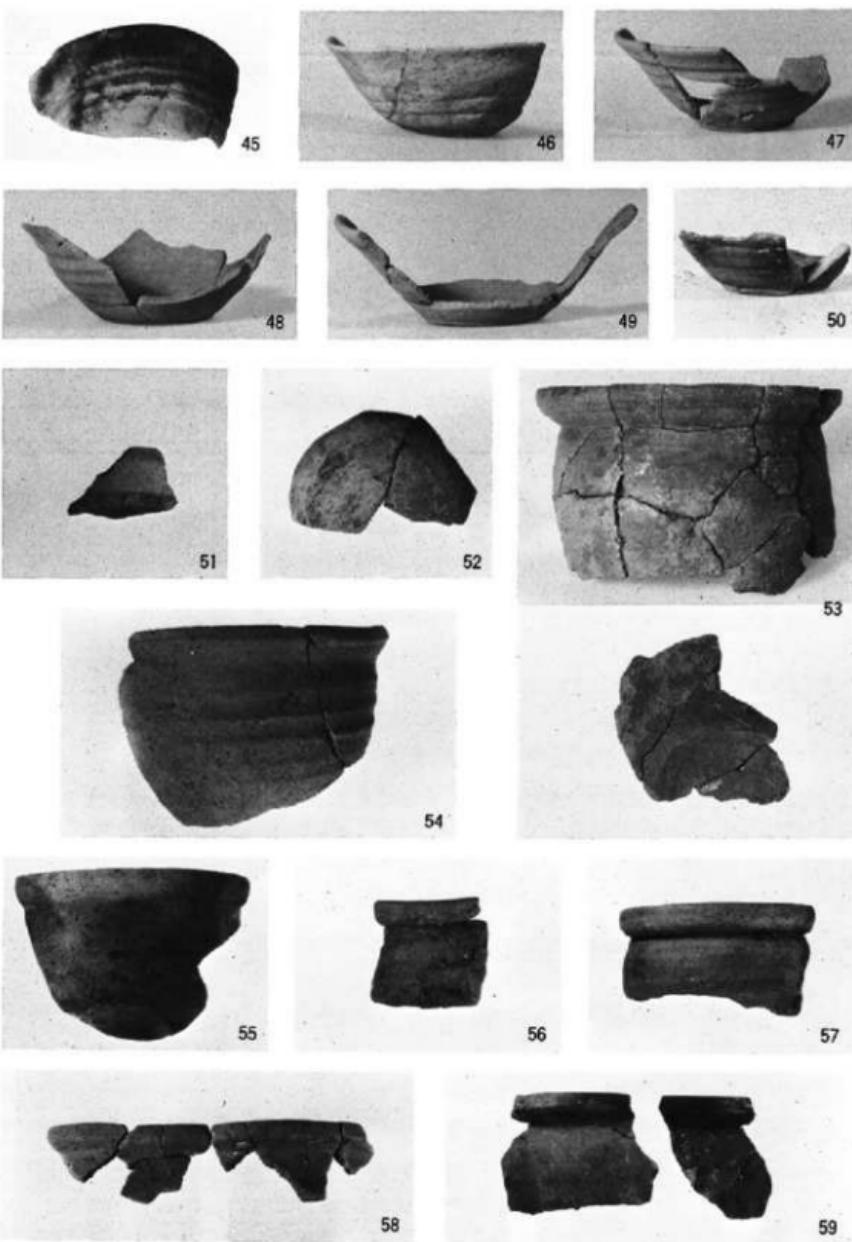
図版 20 土壌出土土器



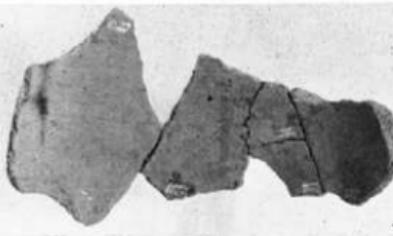
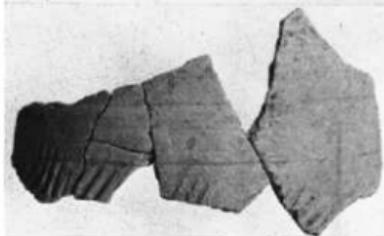
図版 21 SK61土壤出土土器(1)



図版 22 SK61 土壙出土土器(2)



図版 23 SK61 土壌出土土器(3)

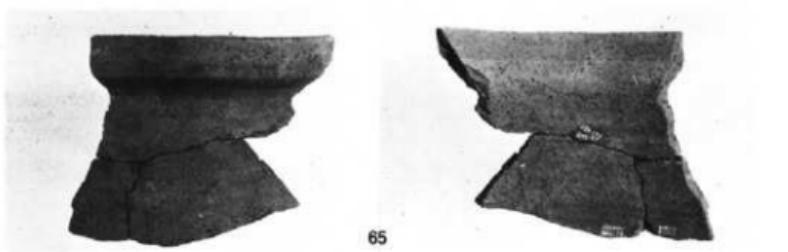


63

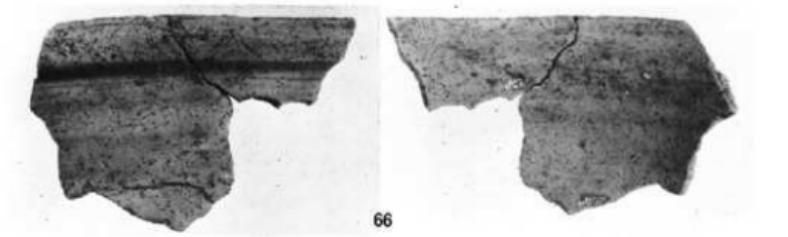
図版 24 SK61 土壙出土土器(4)



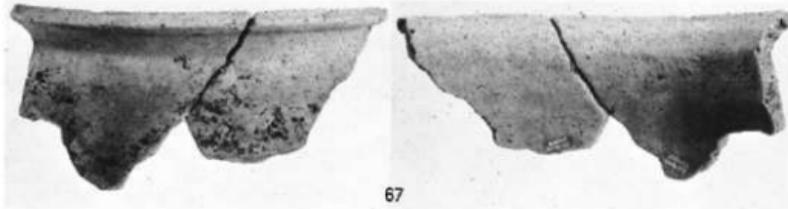
64



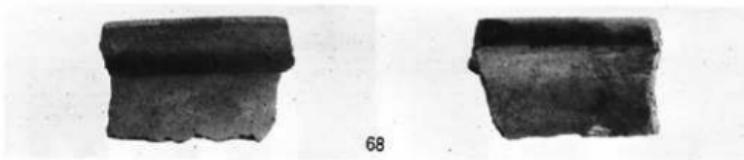
65



66

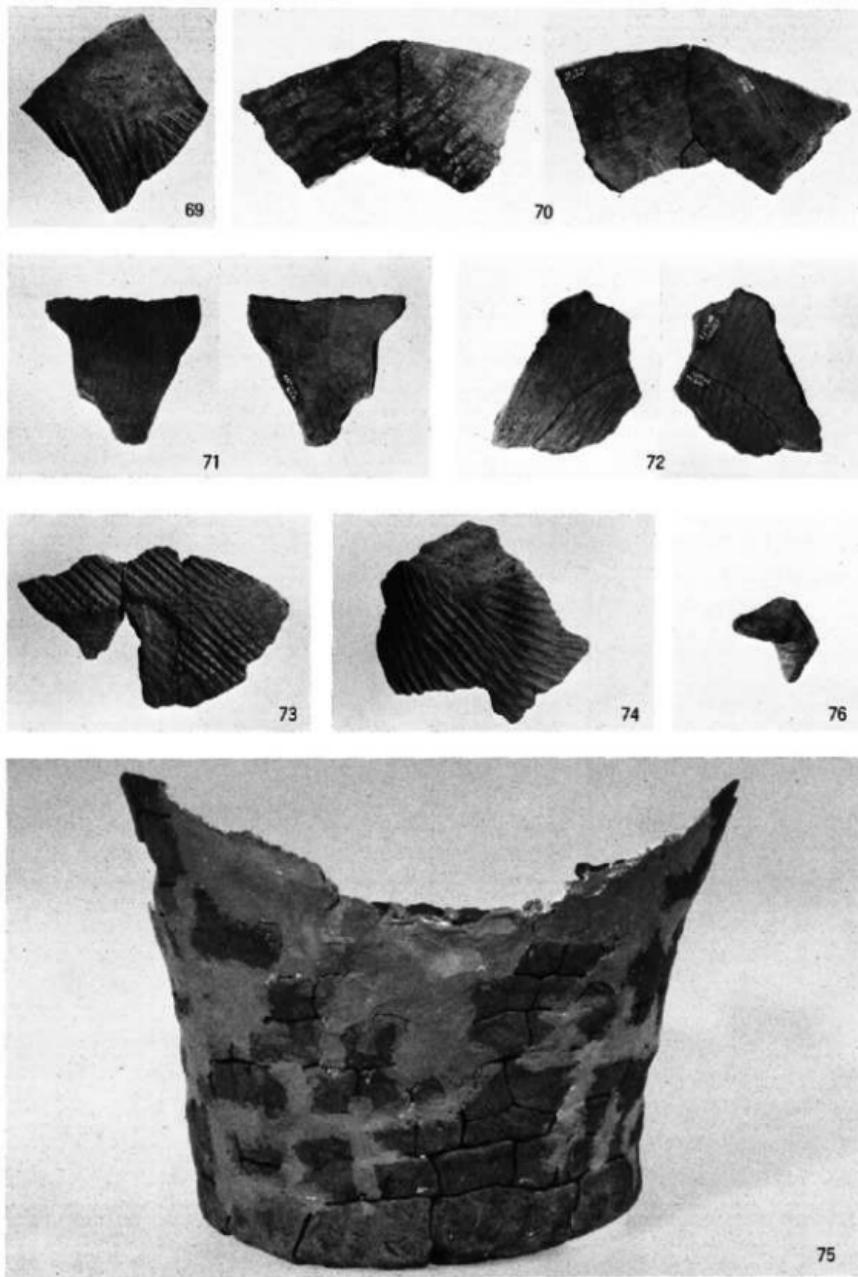


67

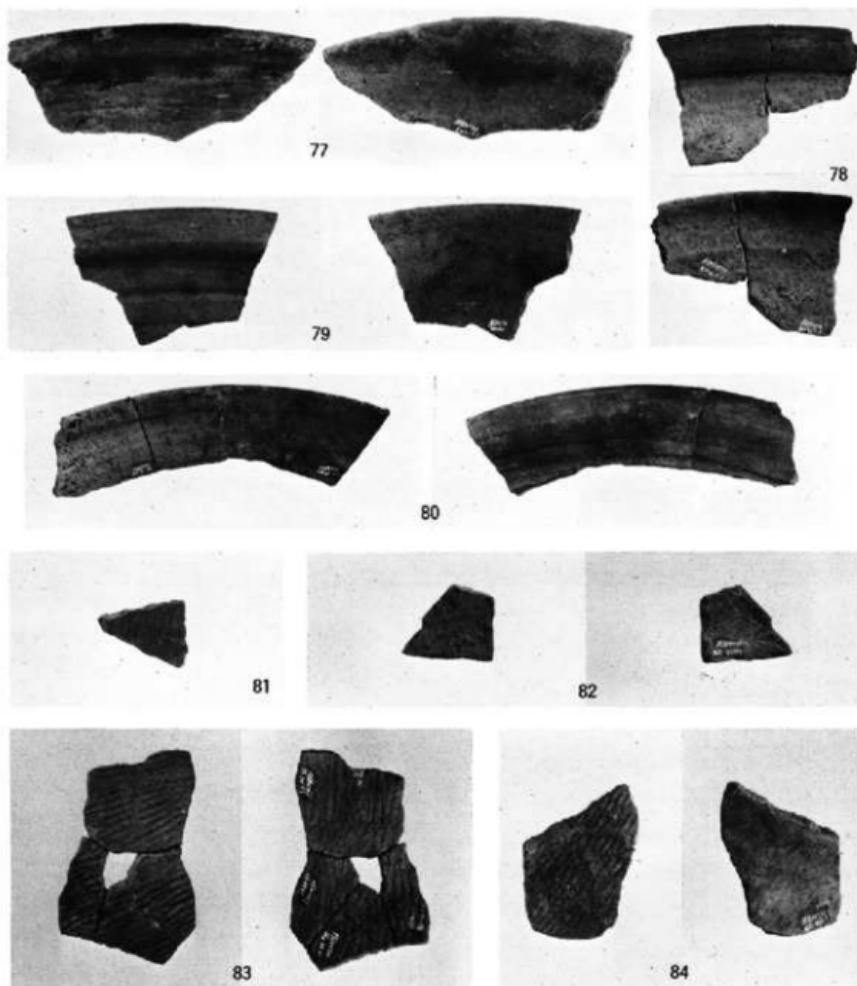


68

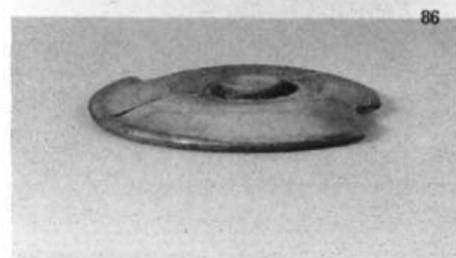
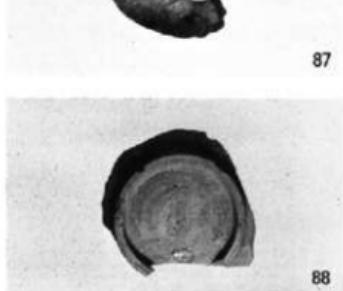
図版 25 SK61 土壙出土土器(5)



図版 26 SK61土壤出土土器(6)・溝状造構出土土器



図版 27 包含層出土土器(1)



圖版 28 包含層出土土器(2)



92



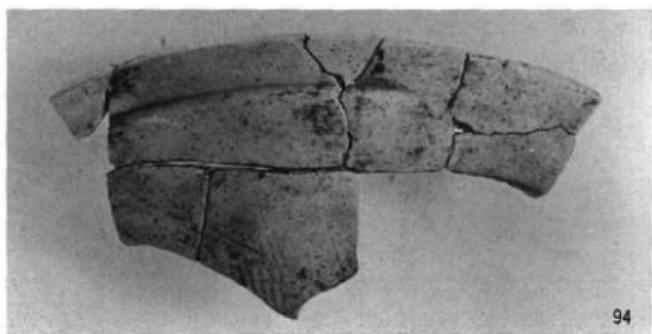
93



95



96



94

山形県埋蔵文化財調査報告書 第80集

ち　　が　　わら　　遺　　跡
千　　河　原　　遺　　跡
発　掘　調　査　報　告　書

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社
鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080㈹
